新編

國文讀本

新制版

卷二

375.9
Se14
資料室

41682

教科書文庫

4
810
41-1931
~~20000~~
~~34763~~

200030
2796

昭和六年十一月六日
中學校國語漢文科用

文部省檢定濟

昭和八年七月六日
實業學校國語科用

千田憲編

新編國文讀本 新制版

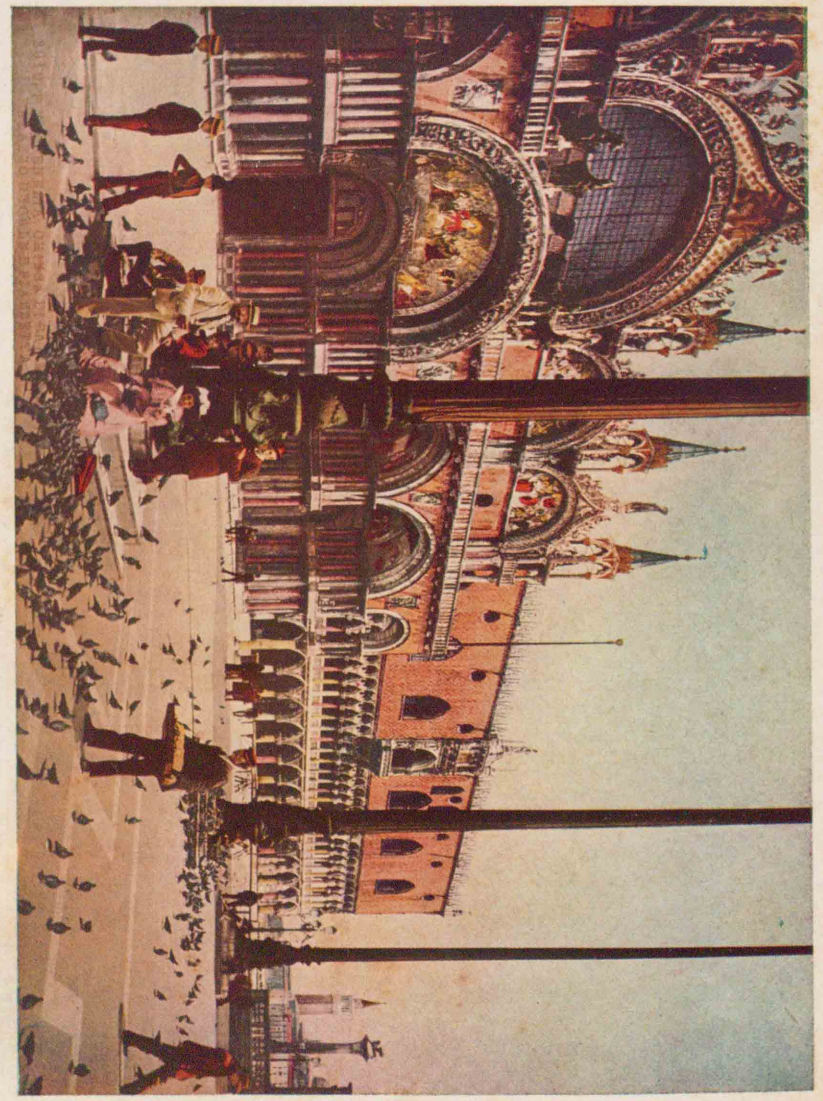
東京 右文書院藏版

校名 神港中學校
學年組 第一學年一組
姓名 大石義見

資料室
395.9
Se14

廣島大學圖書之印

広島大学
教
34763
図書



サン・マルコ寺（スミエヴ）

新編

國文讀本

新制版

卷二

目次

一 日本の民族……大隈重信……一
二 日章旗……木宮泰彦……三
三 祖先の祭祀……松平定信……九
四 七夕竿……篠原溫亭……一四
五 詩三篇……西條八十……一七
一 燕……一七
二 かくれんぼ……一八
三 草鞋……一九

六　ワシントンの舊宅……黒板勝美……二一
七　童心……相馬御風……二九
八　消息三篇……良寛……三四
　一　叔問老へ
　二　時雨
　三　地震
九　通り雨……三六
一〇　小さな旅人……薄田泣菫……三九
一一　法海師と賴山陽……南條文雄……四八
一二　噴煙……夏目漱石……五三
一三　足元の用心……和田垣謙三……六八
一四　お山の行者……島木赤彦……七一
一五　雀……北原白秋……七四
一六　原始林の時雨……國木田獨歩……八〇
一七　ふれ〳〵粉雪……新村出……八七
一八　かうばしい果物……澁川玄耳……九三
一九　甲冑堂……橘南谿……九八
二〇　海外だより……吉村冬彦……一〇二
　一　ブェニスから
　二　ローマから
　三　シャモニから
二一　秋冬の句評釋……河東碧梧桐……一〇九
二二　五兵衛大明神……小泉八雲……一一六
二三　大石良雄……山路愛山……一三〇

二四　針葉樹……笠井信一……一四三
二五　明治天皇の御遺物を拜す……一四五
二六　明治神宮と松……大町桂月……一五九
二七　詩二篇……一六一
二八　山田長政……一六二
二九　小楠公……一七一
三〇　出でんと欲して壁に題す……一七六
三一　重盛の忠孝……一七七
三二　格言十二則……一九三

鹿島大學圖書之印

新編國文讀本　新制版　卷二

大隈重信

一　日本の民族

明治天皇御製

くにたみは一つ心にまもりけり[1]とほつみおやの神のをしへを[2]

日本は東海の大島國なり。山秀で、水清く、氣候和順にして、天與の富は饒かなるあり。こゝを以て、古より諸種の民族相率ゐて來歸し、我が國土は能く之を洗煉、同化して、天下悉く其の種を一にし、其の語を同じくする大日本民族を渾

大隈重信　佐賀縣の人、政治家、侯爵、大正十一年歿、年八十五。

率ゐる。
洗煉　
渾成

敬ひ。
宗主
廉直
仁恕
恬淡
耐ふる。
希ひ。
攝取
用ゐる。

成したり。日本民族は生意盛んに、團結の念強く、祖先を敬ひ、兒孫を慈しみ、家族をもつて國家の根本とし、而して建國以來一系の皇室を宗主と仰ぎ、未だ曾て他の侵略を被らず、以て無比の國體を發揮したり。

日本民族は自然を愛し、平和を喜び、清潔を好み、勇敢にして溫雅、快活にして廉直なり。仁恕にして殘忍ならず、恬淡にして偏執するところなし。然れどもまた進んで危を冒し、難に耐ふるの性を有す。

日本民族は進取を尚び、知識を希ひ、同化の力に富む。他の文明に觸るゝや、直ちに其の長を攝取して、自國の發展に資す。古くは支那・印度、近くは西洋の文明を輸入し、之を用

ゐて政治を改め、文教を興し、風俗を移せり。宗教に於ては概ね信仰を束縛せず、異宗の紛爭により國家の危害を招きたることなし。佛教は神道と相共に行はれ、基督教もまた漸く行はれて、國風の同化を受くるに至れり。

行はる
對峙

かくのごときは卽ち我が國民性の致すところなり。世界に卓絶せる國體を保ち、上下三千年の國家を繼ぎて、こゝに新運を開き、列國と對峙するに至れること、誠に故あるかな。

―「改訂國民讀本」―

二　日章旗

木宮泰彦

凡そ國旗は國家の標號であるから、その國の歷史を語り、

木宮泰彦　靜岡縣の人、國史家、靜岡高等學校教授、明治二十年生。

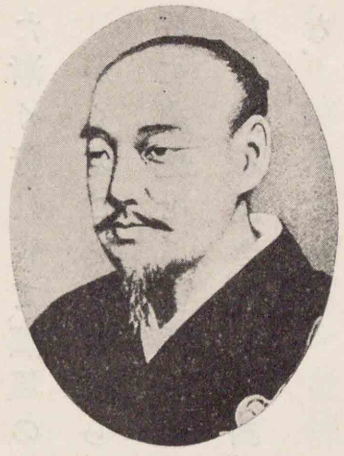
やう　端正

思ひ

水戸烈公　德川齊昭、水戸藩主、萬延元年歿、年五十一。

驚愕

その國の國體を表し、その國の國民精神の理想を示すものでなくてはならぬ。世界いづれの國と雖も、國旗の制のない國はないが、我が日章旗のやうに鮮明で純一、端正で雄大なものはない。」



德川齊昭

しかし我が日章旗が國旗として制定せられるまでには、幾多の曲折があつたもので、それに就いても思ひ出されるのは、水戸烈公の功績である。

嘉永六年六月米艦四隻が浦賀に來たつて交通を求めた時、我が國の上下驚愕して爲すところを知らず、幕府は水戸の烈公を起して事に與らしめた。その年の九月、幕府は烈公の議を用ゐ、始めて大船建造の禁を解いた。一度大船建造の禁を解いたのであるから、各藩に於ても大きな船が漸次建造せられ、中には蒸汽船すら造るものもあつた。隨つて我が國に於ても、外國船と紛れない爲に、國旗を制定して船印とする必要が起つた。當時これを國旗といはず、總船印と稱してゐた。

解いた

有司

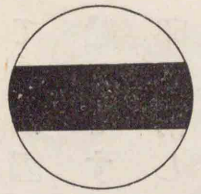
衆議紛々

そこで幕府は、有司に命を下し、意見を奉らしめたところ、評定衆は旭日を以て總船印となすべしと論じ、大目付、目付等は中黑を用ゐるべしと主張し、衆議紛々として、何等決するところがなくて終つた。

翌安政元年五月再び國旗制定の論が起つて、大目付、目付等は總船印には中黒を用ゐ、幕府の旗には日の丸を用ゐるべしと主張した。當時烈公はこれに反對して、中黒は新田帝國の標號たる總船印に用ゐ、日の丸を以て幕府の旗印とするのは、大小輕重を顚倒したもので、その當を得ぬ。苟くも國意を代表して威を萬國に輝かす國旗には、日の丸でなくてはならぬ。幕府は中黒を以て印とすべしと論じて、その旨を幕府に建議せられた。けれども大目付、目付等は前議を固執して動かない。

大小輕重

固執



中黒

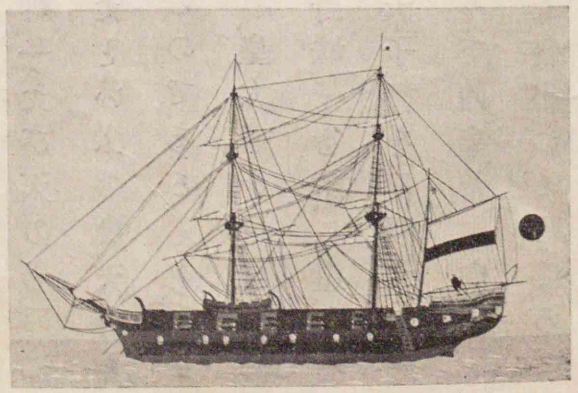
そこで烈公は七月一日再び建議案を奉り、中黒を以て國旗とするの不可を論じ、日章旗の圖まで添へて意見を述べられたので、幕府も遂に烈公の議を用ゐ、衆議を排して日章旗と決定した。

後數年を經て安政七年、外國奉行新見正興等が北米合衆國に使し、條約の批准交換を行つた。この時始めて堂々日章旗を飜して彼の國に行つたのであるが、彼の國人はその壯烈な意匠を見て驚嘆したといふことである。

添へ。

批准交換

いふ。



江戸幕府の軍艦鳳凰丸

國旗の制定はかくの如くであるが、その紋章の由つて來たつたところは、甚だ遼遠である。畏くも皇祖の御名は天照大神、又は大日靈貴と申し奉り、大神一たび天の岩戸に隱れさせ給へば、天地爲に晦冥になつたといふのは、天日とその德を等しくし給へることを物語るのである。したがつて天皇の御位を天つ日嗣と申し奉り、皇太子を日嗣の御子、と申し上げてゐる。聖德太子が小野妹子を隋に遣し給ふや、その國書にいはく「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。」と。又いはく「東天皇敬みて西皇帝に白す。」と。げにや我が國はアジヤの東方に位し、日出づるところの國である。

給へ。
晦冥
アジヤ
Asia.

旭日の輝々たる光は熱烈活動のさまを示し、その眞紅の色は皓潔至誠の情を示してゐる。我が日本の標號とするに、日章旗を措いて他に何があらう。

皓潔至誠
あらう。

三　祖先の祭祀

松平定信

―「おもしろい日本歷史の話」―

人は父母に本づき、萬物は天地に本づきて生ずるものなり。先祖無くば、いかでか父母有らん。父母無くば、又いかでか此の身有らんや。さて、其の生ける時には事へて誠を盡しあへざるが故に、祭祀の禮あり。

祭祀の禮は人道の本なり。こゝに於て誠を盡さざる時は、人道闕く。譬へば、父母・先祖は木の根幹の如し。もろも

松平定信　田安宗武の第七子、磐城國白河の城主松平定邦の嗣となる、幕府の老中、樂翁と號す、文政十二年歿、年七十二。
譬へ。

ろの枝葉・花實は伯叔父・姑・兄弟・從兄弟、其の外の諸親類・子孫の如きものなり。其の木の根に培ひ、水そゝぎて、根本堅ければ、大風にも倒れず、炎暑にも枯れずして、枝葉・花實、時に從ひ茂り榮ゆるなり。

松平定信

若し其の根のくつろぎ搖ぐにも、培はず、水そゝがずして捨置くときは、或は大風に吹倒され、或は炎暑に枯るゝは必然の事なり。枝葉ばかり大切にして、それに水そゝぎたりとも、其の根本枯れたるうへは、枝葉のみ榮ゆべき理無からん。人の父母・

さへ。

必然

うへ。

先祖に疎なるは、みづから木の根を搖がして倒すに異ならず。其の根枯るれば、かず〳〵の枝葉も從ひて枯るゝは、皆人の知る所なり。されば、父母・先祖に厚くして、子孫の繁榮を祈るべきことなり。

さるに、父母・先祖に疎にして、賴むべき筋も無き佛神に媚びへつらひて、子孫の榮えんことを願ふは、道理無き事なり。こを譬へていはば、松の木の茂り榮えんことを求むとて、梅の木に培ひ、水そゝぐが如し。松の榮えんことを求めば、其の根に培ひ、水そゝぐに若かざらん。梅の榮えんことを願はば、其の根を養ふに若くこと無からん。これ實理にして、しるしあることなり。

從ひて

榮えん

微意
事ふる
公務
たとひ
身まかる

但し父母・先祖に厚くするは、全く子孫の繁榮を願ふのみにはあらず。本に報ずる微意なり。父母存生の中に事うまつるを計るに幾何も無し。幼にしては未だ事ふる道を盡さず。稍成長しては力を盡すことを知ると雖も、或は公務に暇無く、或は文武の學、又は親戚の交、他人の應對、職業の務等によりて、父母の膝下に在りて事ふることを得ざる日多し。たとひ生涯父母の膝下を離れずして事へたりとも、限りなき恩をば報い盡すべきに非ず。父母既に身まかりて後は、悔の八千度も甲斐なし。故に、歿後には其の神靈に事へて、在すが如く誠を盡すは、己むことを得ざる至情を盡すのみなり。子孫たるもの先祖に厚くば、先祖の神靈悦ば

靈驗
惑へる
つひやす

ざらんや。さあらば、祈らずとても子孫の繁榮疑ふべからず。先祖の神靈に子孫を守らざる神靈有らんや。

然るに、愚なる者は父母祖先の神靈を粗末にして、願ふべき筋も無き神佛にても、靈驗あらたかなりといへば、此處の神に、彼處の佛に、多くの金銀を擲ち、我が身及び子孫の福を願ふは惑へるなりけり。其の金銀を以て民を救ひ、善事に用ゐるは、祈らざる祈にして、自づから其の身及び子孫にも福有るべきことは必然の道理なり。「神は非禮を享けず。」といふに、非禮の祈禱に多くの金銀をつひやすは、惜しむべきことならずや。

—「燈前漫筆」—

四　七夕竿

篠原溫亭

七夕の話が出た。子供等はまだ見たことが無いらしい。一つやつて見せることにする。と、私自身の心にも、幼い嬉しさが四十年ぶりに湧いて來る。

大森界隈では色紙がない。勤の歸りに、日吉町附近の古い紙屋に寄つて見た。出されたのは黃と紅と青の三色しか無かつた。まだ二色ある筈だといつて、亭主は捜してゐたけれども、見つからなかつた。けれどもそれは此頃の薄い紙質でなく、素性のよい生紙であつた。私は忘れてゐた昔の心持に觸れるやうな氣で、その紙を撫でた。紙屋の亭主は此頃では神主が買ひに來るばかりだといつてゐた。

その夜すぐに短册を作つた。色紙・衣裳・吹流しなども作つた。私は指圖のみして、なるべく子供等に作らせようとした。出來上つたものを床に積むと、色短册・色紙・色衣の小山が出來た。吹流しは夏帶のやうに卷かれてある。

明くれば、舊曆の七夕である。四人の子供等はめい〳〵お盆を持つて、露取りに出かけた。出かへりの日光はまだ人の頭を越すくらゐで、よく晴れた朝であつた。芋の葉にあるとか、草の中がよく取れるとか彼等の呼びかはす聲が靜かな屋敷内に反響する。取つて來た露はコップに一杯程あつた。その中には、草の實だの蟲殼だのが一面に浮い

篠原溫亭　名は英喜、熊本縣の人、俳人、國民新聞記者、大正十五年歿、年五十。
湧いて
素性

買ひ
よう
くらゐ
かはす
コップ Cup.

てゐた。——やはり私自身がした時のやうに——それがま
た私に子供の時を想はせた。
私の父は手本に漢詩を書いてくれた。私には漢詩が出
來ないから、俳句を作つて書いてやつた。子供等はそれを
色紙・短册に書いた。彼等自身も俳句を作らうとして見た
けれども、ものにならなかつた。次女は童謠を作つて書い
たりした。
竹は近所の瓜村君の孟宗藪から一本小さいのを貰つて
來た。葉枝葉枝に結びつけると、かなりの賑はしさとなつ
た。おし立てて山茶花垣に結びつけると、色々の形した色
紙がひら〳〵と風を受けて動く。初秋の青い空に必ずあ

想はせ

賑はし

るべきものに思はれた。私は今後年々やつて見たいと思
つた。

—「その後」—

西條八十
東京市の人、詩人、明治二十五年生。

五　詩三篇

一　燕

秋がきたとて
ふるさとの
南へいそぐ
燕
ゆくては遠い

西　條　八　十

アフリカ
Africa.

*アフリカの
船の時間を
氣にかねて
酒屋の軒で
宙がへり
時計をのぞく
燕

二　かくれんぼ

おもひだすのは
かくれんぼ

櫺子

待てどくらせど
來ぬ鬼に
さびしい納屋の
櫺子から
そつと覗けば
裏庭の
柿の木にゐた
みそさざい

三　草鞋

草鞋よ　草鞋よ
さやうなら
夕日が赤い
田舍みち
切れたばかりに
棄ててゆく
草鞋よ　草鞋よ
さやうなら
都そだちの
おまへゆゑ

六　ワシントンの舊宅

黒板勝美

―「西條八十童謠集」―

今夜は夢が
さびしかろ
古い草鞋よ
さやうなら

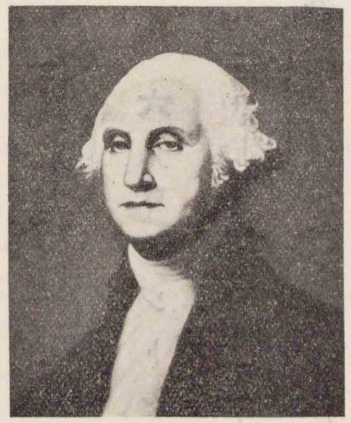
六　ワシントンの舊宅

*ニューヨークからワシントン府に遊んで、米國議院・同圖書館・大統領官宅をはじめ癈兵院等の諸所を見物した後、一日建國の元勳*ワシントンの舊宅を訪うた。

ワシントン府の南十六哩、*ポトマック河の岸なる鬱蒼たる小丘の上に建てる瀟洒なる古風な家が卽ちそれで、この

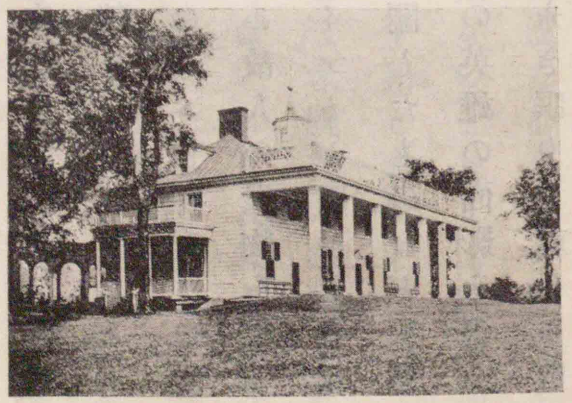
黒板勝美　長崎縣の人、歴史家、文學博士、東京帝國大學教授、明治七年生。
ニューヨーク　New York.
ワシントン　George Washington.（西暦一七三二―一七九九）

丘は有名なるブ*ァーノン丘である。ワシントンが獨立軍に迎へられて出でた草廬はこゝであつた。彼が大統領の任期滿ちて後、幸福なる田園生活を送つたところも亦こゝであつた。ワシントン府から一時間ごとに發する電車は、この古英雄の舊宅を訪はんとする觀光客を滿載し、沿道の史蹟を說明する案內者の聲に耳を傾けつゝ、一時間にしてその門前なる停留場に達するのである。



ワシントン

この舊宅は一千八百五十五年、ワシントンの子孫がこの屋敷を賣却せんとした時、*アン＝パメラ＝カンニンガム女史の熱烈なる愛國心によつて、はじめて合衆國民の共有となつたもので、全國の學童また各、金五セ*ント（Cent.）を投じて、そして凡そ四十萬圓の金額を集めて、買收することが出來たのである。今や米國に入るものは必ず一たびこゝに遊ばざるを得ぬ名所であるのみならず、合衆國民が巡禮する札所（札所）の一番である。



ワシントンの舊宅

屋敷はやゝ手廣な構で、邸內の掃除よく行きとゞいて、如何にも心地よく、門を入り凡そ一町にして住宅に達する。ポトマック河の流れるあたり、春風

*ポトマック　Potomac River.
*鬱蒼　瀟洒
*ァーノン丘　Mt. Vernon.
*滿載
*アン＝パメラ＝カンニンガム　Ann Pamela Cunningham.

に靡く楊柳の下に小蒸汽船の繋がれたる、さては對岸遠く連る麥畑の青々としたる、さながら一幅の畫圖のやうに、この邸宅の前に展開されてゐる。住宅は十六間に五間程の木造三階建で、臺所は母屋より別に離れて建ててある。大廣間・圖書室・音樂室・食堂など皆もとのまゝに保存され、室内の裝飾家具までその陳列に意を用ゐ、故人の遺物を始とし、彼の米國獨立を援けた佛人ラファイエト*が贈つた佛國巴里のバスチール*の鍵、又は獨立軍に關したものなどを展覽せしめるやうになつてゐるので、この英雄の面影を偲ぶべきものは少なくない。中にもその永き眠りに就ける臨終の寢室に入れば、夢のやうに平和な空氣が充ち滿ちてゐる。

一幅の畫圖

ラファイエト Marquis de Lafayette. フランスの武將にして政治家。（西暦一七五七―一八三四）

巴里 Paris

バスチール Bastille. パリーの有名なる一監獄。

ワシントンが、米國の國利民福の外に何物をも考へなかつたのはいふまでもないが、その高潔な心は、その陳列されてゐる遺物の如何にも單調で、質素なのを見ても窺ひ知られるやうである。彼によつて永く平和と光榮とを與へられたこの住宅が、萬世の後に至るまで、米國民が感謝を捧げんために參り詣づる神廟であるのはいふに及ばず、世界諸國の人々が米國のために祝福すべきところは、實にまたこのブァーノン丘に外ならぬのである。ワシントンの英魂は天に昇つたとしても、その精靈はとこしなへにこの地に留りて、米國を護つてゐるのであらう。

この屋敷の西北隅に、ワシントン夫妻の墳墓がある。母

國利民福

高潔

窺ひ

與へ

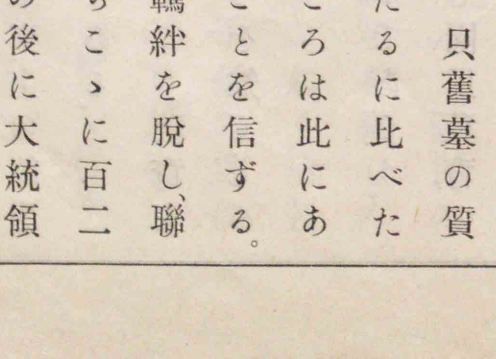
祝福

とこしなへに

屋を出でて歩を西に移せば、車小屋の中にワシントンの馬車が保存されてある。それからだら〳〵坂を下りて、右の方數十歩のところ、こんもりとした森の蔭に、煉瓦を積重ね、*アーチ形の入口に堅く鐵柵を結んであるのが卽ち墳墓で、夫妻の遺骸は二箇の大理石棺に斂められ、その傍らに一族も合葬されてゐる。歩を墓前に移せば、さきに見えた森はこゝに參詣した諸國の帝王が植ゑた記念樹の成長したもので、鬱蒼として永久に翠綠の色を變へぬ趣が見える。しかし一千八百二十四年、ラファイエトが展した墓は、だら坂の左側へ入つたところにあつたので、今も小さい丸い石塔を鐵柵で圍んであるが、或年盜賊に荒された爲、新に現

アーチ Arch.
見え。
植ゑ。
翠綠

在の地に墳墓を起し、その鐵柵の鍵をポトマック河の底に沈め、永世神聖なる場所として、誰もこれに入ることを許さぬことにしたのである。只舊墓の質素なる、新墓の俗臭紛々たるに比べたなどに功名を著した者も大分多かつたのであるが、米國民



ワシントンの墓

に選ばれた者に豪い人物も少なくはない。また南北戰爭ら、ワシントンの喜ぶところは此にあらずして、必ず彼にあることを信ずる。

想ふに、米國が英國の羈絆を脫し、聯邦の共和國となつてからこゝに百二三十年の間、ワシントンの後に大統領

俗臭紛々
想ふ。
羈絆

景仰　をして神の如く景仰せしめる人物は、眞にワシントン一人といつても差支はないであらう。

ワシントンは實にその人格に於ても、政治・軍事上の能力に於ても、卓然として、永く米國の歴史を飾つてゐる。

リンカーン　*リンカーンが特にワシントンをえらくしたのも、教育家が修養上の目標として國民に歸趣するところを知らしめてゐるのも、實にこゝに存するのである。

勞働神聖主義　米國では無論かの拜金主義なるものもあるであらう。併し國民教育の理想として養成しつゝあるアメリカ魂の權化は、ワシントンの人格である。正直・平和・公平・清廉・忠實・沈勇・慈悲、彼は人

リンカーン　Abraham Lincoln.　アメリカ合衆國第十六代大統領。（西暦一八〇九―一八六五）

拜金主義

勞働神聖主義

權化

備へ　間の有する殆どすべての美德を備へて居つた。國の爲出でて戰へば、英軍また如何ともすることが出來なかつたのも、これが爲である。大統領の任期滿つるに及んで、國民の輿望を容れずして高踏勇退し、一平民として餘生を樂しんだのも、またこれが爲である。彼はナ*ポレオンの如く功名心の奴隷ではなかつた。彼は德川家康の如く子孫の爲に謀る人ではなかつた。ワシントンは實に百世の下、人をして感奮興起せしめる偉人である。

輿望　高踏勇退　餘生を樂しむ

ナポレオン　Napoleon Bonaparte.　フランス皇帝。（西暦一七六九―一八二一）

―「歐米文明記」―

相馬御風

七　童心

良*寛は最も淳眞なる人間であつた。最も博大なる愛の

人であつた。彼は何よりも童男・童女を愛したが、彼自らも最後まで同じく、幼兒の如き淳眞な人間だつたのである。

彼は或日例の如く路傍の子供等と交つて、かくれんぼをして遊んでゐた。中に意地のわるい子供が一人あつて、彼が物蔭にかくれたのを、そのまゝ置いてきぼりにしようといひ出して、無理に他の子供を同意させた。子供等は去つた。そして數時間を經ても、なほ彼等は歸つて來なかつた。

しかし和尚は平然と元の通りにして、子供等の「よし」と呼ぶのを待つてゐた。と、やがてそこを通りかゝつた人が、彼

良寛和尚自畫像

相馬御風　名は昌治、新潟縣の人、文學者、明治十六年生。

良寛　俗名山本文孝、大愚と號す、越後國出雲崎町の人、天保二年寂、年七十四。

淳眞　

なほ　

のその樣子を見つけて、驚きのあまり「まあ、良寛樣。何をしてゐられます。」と叫んだ。その聲に彼もおなじく驚いて「ばか、そんな大きな聲を出すと、鬼が見つけるわ。」といつたといふ事が、口碑に傳へられてゐる。何といふ淳眞であらう。

誰かよくかくまでに他を欺かずにゐる事が出來よう。

更にこんな話が傳へられてゐる。ある秋の末の夜、良寛の庵へ盜人が忍び入つた。しかし何一つ奪つて行くやうなものがないので、うろ〳〵してゐた。と、物音に目をさまして、その樣子を見た良寛は、その男があはれになり、自分の着物を一枚ぬいで與へて、やさしく送り出してやつた。しかし彼はあとでその男の身の上を思ひやつて、

口碑　

あはれ　

ぬば玉
うたて

いづこにか旅寢しつらんぬば玉の夜の嵐のうたて寒きに

といふ一首の歌を詠んだといふ事である。何といふ貴く美しい愛の表現であらう。

次に又こんな話が傳へられてゐる。ある年の秋の月の晩のことであつた。良寛は興に乘じて、とある芋畑の中をあちらこちらとさまよひ歩いてゐた。と、やがてその畑の持主がそれを見つけて、これはてつきり畑荒しだと思ひあやまり、突然鐵拳を揮つて、彼の頭を撲つた。そしてそれだけで氣が濟まずに、とう〳〵彼を縛つて、木の枝に吊し上げた。それでも彼はさからはなかつた。が、とう〳〵堪へら

さまよひ。

れ無くなつて、自分は良寛である旨を白狀し、芋などを盜む氣は更に無かつたが、月が佳いのでぶら〳〵歩いてゐたのだと告げて、罪を謝した。百姓は始めてそれと知り、大いに恥ぢいつて、深く罪を謝したが、和尚は少しも相手を咎めなかつたばかりか、むしろ氣持よささうに笑つて、左の如き一首の古歌を口ずさみながら、飄然とそこを去つた。

打つ人も打たるゝ人も諸ともに如露亦如電應作如是觀

何といふ虛心の沙汰であらう。

更に又こんな事が、彼と親交のあつた解*良榮重といふ人の手記によつて、傳へられてゐる。

恥ぢ。
さう

飄然

解良榮重　越後國西蒲原の豪家、國學に通ず、歿年未詳。

情意
つひに
百計

「人曰く錢を拾ふは至つて樂しと。師これを聞き、自ら地上に錢を捨て、やがて自らこれを拾ふ。更に情意の樂しきなし。はじめ、人我を欺くかと疑ふ。捨つること再三、つひにそのあるところを見失ふ。師百計して、やうやく拾ひ得たり。その時に至つて、はじめて樂しきを知る。且曰く、人我を欺かずと。」

これは又何といふ無邪氣であらう。しかもこれ決して世にありふれた禪僧輩の所謂奇行ではないのである。

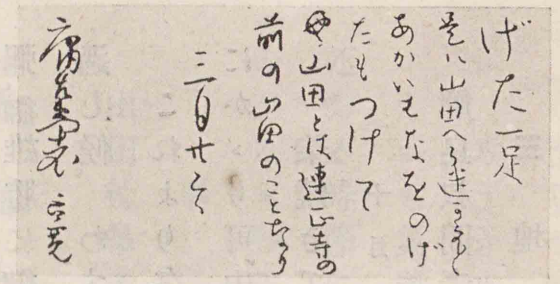
—「大愚良寛」—

八　消息三篇

良寛

げた一足
是は山田へ
被レ遣可レ被
レ下候あかい
はなをのげた
もつけて山田
とは連正寺の
前の山田のこ
となり
三月廿二日
良寛
庸左衛門老

叔問
解良榮重の父、詩歌をよくす、文政二年歿、年五十五。



良寛筆蹟

一　叔問老へ

これはあたりの人に候。夫は他國へ穴ほりに行きしが、如何致し候やら、去冬は歸らず、子供を多くもち候。子供また十より下なり。この春は村々を乞食して、その日を送り候。何か與へて渡世の助にも致さんと思へども、貧窮の僧なれば致し方もなし。何なりと少々このものに御與へ可レ被レ下候。

正月一日

良寛

叔問老*

托鉢

二　時　雨

先日は御書面かたじけなく拝見仕り候。寒氣の節彌〻御雄勝に御座被〻遊、大慶に奉〻存候。野僧無事に罷り過し候。わすれ候錢竝に托鉢の米落手仕り候。これより冬ごもりのしたくに候。來春は早速御目にかゝり可〻申候。以上。

柴燒きて時雨きく夜となりにけり

十月五日　　良寛

解良叔問老

三　地　震

地震はまことに大變に候。野僧草庵は何事なく、親類中死人もなく、めでたく存じ候。

うちつけに死なば死なずてながらへてかゝるうきめを見るがわびしさ

しかし災難に逢ふ時節には災難に逢ふがよく候。死ぬる時節には死ぬるがよく候。これはこれ災難をのがるゝ妙法にて候。かしこ。

良寛

臘八

山田杜皐

うちつけに
わびし

臘八
山田杜皐
越後國三島郡與板町の豪家、俳句をよくす、歿年未詳。

臘八

*山田杜皐老

九　通り雨

木下利玄

木下利玄
岡山縣の人、歌人、子爵、大正十四年歿、年四十。

とみに

のぼり來て旅籠につけばとみに寒し障子にあかきお山の夕陽

湖の上に通り雨降り舟べりの乾きせはしく濡れゆくを見る

とがり波灣一ばいに騒ぎ立ち磯崎こえて日は傾けり

ゆゝし

若山牧水
名は繁、宮崎縣の人、歌人、昭和三年歿、年四十四。

のびあがり倒れんとする潮波蒼々たてる立ちちろ〳〵と岩つたふ水に這ひあがる赤き蟹ゐてゆゝしもの

―「木下利玄全歌集」―

若山牧水

薄田泣菫
名は淳介、岡山縣の人、詩人、明治十年生。

古杉と苗植ゑなめしわか山とならびて晴れぬ。

秋のよき日に

水痩せし秋の川原の片すみにしづかにめぐる

水車かな

浪の間にかたむき走るわが船の窓に見えつゝ

富士は晴れたり

―「牧水全集」―

一〇　小さな旅人

薄田泣菫

私たちが七つ八つの頃には、そろ〳〵秋が更けて來ると、

晴れきつた空を毎日のやうに雁が渡つた。私たちはそれを見かけると、吹きさらしの野路に立つて、空の一方を振仰

鉤　にじむ

ぎながら、

雁よ棹になれ
棹になつたら鉤になれ

と、その長い行列が漸次に雲の中ににじみこんでしまふ迄、聲を嗄して叫んだものだ。が、いつの間にか雁も少なくなつて、今では晝間その長い列が空を渡ることは、よく〳〵人氣遠い野原かどこかでないと、めつたに見られなくなつた。

雁

その頃はまた後の岡に行つて見ると、葉の落ちかゝつた

あわたゞし　言はうやう　覺えまづ　矮小

雜木林に、小鳥が澤山來てゐたものだ。小鳥といふと、私は海などを越えて來る彼の小さな旅人の、あわたゞしい旅を考へて、いつも言はうやうのない淋しい旅心地を覺える。

百舌

まづ百舌が來る。秋の彼岸が過ぎて、そろ〳〵日影が黃色がかつて來ようといふ頃、私たちはどうかすると暖い日の午過、そこの木立で、甲高い鋭いその聲を聞くことがある。「あゝ、もう秋だな。」と思はず振返つて見ると、矮小な櫟にまじつて、ずばぬけて背の高い楡の木に百舌が一羽止つて、黃色い夕陽を受けて、羽が金のやうにきら〳〵

してゐるのが見える。私たちはその瞬間、言はうやうのない強い、健やかな氣持が胸に流れるのを覺える。

次には鶺鴒が來る。山家の午過、懶さうな蟋蟀の聲もいつの間にか止んで、枯葉一つ寢返りを打つ音までがはつきりと耳に入る靜けさの底に、どこやら窶れた人の溜息ともいつたやうな微かな聲が洩れて來て、何の音ともわからない。すると、樹蔭の韮畑かどこかで、餘念もなくせつせと仕事に精出してゐた農夫が、ひよいと顏を擧げる拍子に、すぐ鼻先の小枝から、枯葉のやうな小鳥がついと身をそらして、逃げていつ

鶺鴒

韮

悲哀

馴染

てしまふ。それが鶺鴒だ。

鶺鴒といつたら、まるで悲哀を抱いてゐる人のやうに、大抵は連に離れて、たゞ一人で出て來る。そして、そこらの小枝に止るなり、何か眼に見えぬ昔馴染でも招くやうに、ひよくり、ひよくりと輕い御辭儀をして、さゝやくやうな聲で唄ひだす。私はそれを見ると、他の爲、世の中の爲といつたやうなわけでなく、自分一人の爲に唄つて、それで滿足してゐる人たちを思ひ出さずにはゐられない。

鶺鴒が來てものの十日と經たぬ間に、四十雀が來る。この鳥は鶺鴒と違つて、十羽も二十羽も群をなして來る。山から里へ移る折などには、まるで時雨でもするやうに、細かい羽

聞え。
まはす
かうした

音がさつと空を掠めて聞える。そして、そこらの木立におりるなり、めまぐるしいほどすばしこく、雀の甕などを啄きまはしながら、鼠色の背をそらし、柔かみのある圓い胸を見せて、透通つた銀の鈴を振るやうな聲で、早口にしやべり續ける。で、かうした大層な群の中には、きつとまだ羽の伸びきらない、灰色の産毛そのまゝの雛兒が交つてゐて、もんどり打つて宙に返ることもあるが、そこは又馴れたもので、いきなりひよいと下枝につかまつて、ませた身振で、樹肌のひゞを啄いたりする。ま

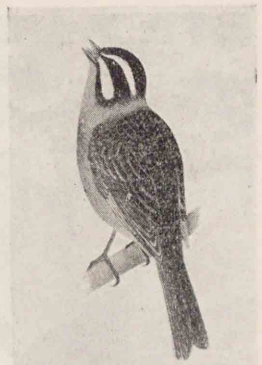
四十　雀

るで山家育ちのすばしこい、きさくな魂そのものを見るやうな氣持がする。

鶫

小雪がちらつく頃になると、鷦鷯（みそさゞい）が來る。これは鷚と同じやうに、大抵獨法師で、それもこつそりと附近を忍ぶやうにして來る。冬の初の午過、山近い田舍の小家で、爺は火燵に潜りこんで、こくりこくりと居眠をする。その側で婆さんはせつせと絲車を繰つてゐる。煤けた障子に、檐に吊した干菜の影が見すぼらしく映つて、時をり、ちつぽけ

な小鳥の影がちらついたりする。どうかして、絲目が切れて、睡さうな錘の音がばつたり止むと、こそ〳〵と掛菜をむしる音がする。が、老人の耳にそんな音の聽取れようはずがない。婆さんは俯いたまゝ、また絲を紡ぎにかゝる。さうかうする間に、鳥は舌打をするやうな聲を立てながら、ひよい、ひよいと小刻みに、狹苦しい物蔭を出たり入つたりして移つて行くのだ。それが鷦鷯である。



白頬

鷦鷯と後先になつて頬白が來る。冷たい雨のびしよびしよと降る中を、獨者の頬白が灰色の胸までぐしよ濡になつて、しよんぼりとそこらの木に止つてゐるのを見ると、私の國でこの鳥の啼聲を解いて、

一筆啓上つかまつる
子供泣かすな、火の用心
今度の便に金十兩
やりたいけれど、一文も御座無く候

と言傳へるのを思ひ出して、しみ〴〵と世渡りのむづかしさと、旅心の寂しさを思はずにはゐられない。

後の雜木林にこんな小鳥が來る頃になると、野にはもうそろ〳〵鶫が來、鷸が來る。

—「畿內行脚」—

一一　法海師と賴山陽

南條文雄

南條文雄　梵語學者、文學博士、帝國學士院會員、昭和二年歿、年七十九。

耶馬溪で有名な豐前の山國谷に、古城の正行寺といふ寺がある。そこの雲華上人は文藝の嗜み深く、賴山陽とは無二の親友であつた。で、山陽が九州旅行の際は、この雲華上人の許に滯在して耶馬溪の奇勝を探り、その名を天下に紹介したものであつた。

その頃のこと。肥後八代の光德寺の法海師が德望一代に高きを聞き、山陽は雲華上人の紹介で、或日はる〴〵師を訪ねて行つた。

德望一代に高し

「賴久太郎、老師の高名を慕うて參つたものでござる。お

慕うて

取次をお願ひ申す。」

と申し入れた。

折から机の前に端坐して讀經してゐた法海師は、やをら起つて山陽に面會した。山陽は初見の挨拶を終つてから、自分の書いた楠公傳の稿本を出して、

やをら

「老師の御批評をお願ひ申しまする。」

と言つた。師はその表紙にちらと一瞥を與へたまゝで、手に取らうともしなかつた。

一瞥

取らう

「このごろ噂に聞けば、藝州の儒者で久太郎とやら京へ出て酒ばかり飲み暮し、三年が間、只の一度も歸つて親の安否を尋ねようともせぬものが、楠公の傳など書いて得意にな

御主　言ひ。　出づ。　椿事　愚納　會ひたう。

つてゐると云ふことちやが、では御主の事でござつたか喃。」

言ひ言ひ法海師の鋭い眼光が山陽の面上を電のやうに掠めた。山陽は我知らず面を伏せずには居られなかつた。

頼山陽

「『忠臣は孝子の門に出づ。』とは古聖人の金言ぢやが、不孝者の筆を以て忠臣の傳を書くとは、曾て聞いたことのない椿事ぢや。楠公の靈知るあらば、果して何と思はれるであらう。愚衲もそんな不孝者には會ひたうない。是非ともとならば、出直してござれ。ではさらばぢや。」

言ふかと思ふと、さつさと起つて、もとの座に歸り、靜かに讀

傳うて　默拜

經すること初の如くであつた。

やつと頭をあげた山陽は、冷たい汗が脊筋を傳うて流れるのに氣が付いたが、今は取りつく島もない。師の前に默拜して寺門を出た。

豪快無比

「さすが一宗の學頭、偉い和尚だ。」

それが、當時文名一世に鳴る豪快無比な山陽の、腹の底を絞つて出た聲であつた。

正行寺に歸つて、雲華上人にこの事を話すと、

「さうぢやつたか、そりや丁度よい。」

さうぢや

山陽は思はず上人の顏を見つめた。

「貴公、*陽明學をやつたぢやろ。今が丁度その知行合一の

陽明學　明の王陽明の唱へし學說、知行合一を主とす。

ときぢやよ。」

「知ると行ふとは一にして二なるべからず。」といふのが王陽明の學說であつた。山陽は心友雲華の前に、心からなる感謝を捧げずには居られなかつた。

「法海師は夏の日だ。上人は冬の日だ。夏日は畏るべく、冬日は愛すべし。これ我が師、これ我が友。」

言ひ終つた山陽は、卽日發足して老親の膝下に歸省すべく安藝へと急いだ。

右は『豐繪詩史』に載する所の大意である。今の世、我々はこの法海師の言に聽くべきものが無いであらうか。雲華上人の敎に從ふべきものが無いであらうか。はた又、山陽

心友

豐繪詩史　全三卷、大分縣日田町、長福寺の住職小栗憲一著、明治十七年發行。

の純眞な態度に學ぶべきものが無いであらうか。修養の方法は百千萬億あるであらう、しかも卷いてこの一住話にをさめ得るとおもふ。

—「キング」—

一二　噴煙

夏目漱石

「あの音は壯烈だな。」

「足の下が、もう搖れてゐるやうだ。——おいちよつと、地面へ耳をつけて聞いて見給へ。」

「どんなだい。」

「非常な音だ。たしかに足の下が、うなつてる。」

「その割に煙がこないな。」

夏目漱石　名は金之助、東京市の人、文學者、大正五年歿、年五十。

聞いて

「風の所爲だ。北風だから、右へ吹きつけるんだ。」

「樹が多いから、方角がわからない。もう少し登つたら、見當がつくだらう。」

しばらく雜木林の間を行く。道幅は三尺に足らぬ。いくら仲が善くても、竝んで歩く譯にはいかぬ。圭さんは、大きな足を悠々と振つて先へ行く。碌さんは小さな體軀をすぼめて、小股に後から尾いて行く。尾いて行きながら、圭さんの足跡の大きいのに感心してゐる。感心しながら歩いて行くと、段々後れてしまふ。

昨日の澄切つた空にひきかへて、今朝宿を立つ時からの霧模樣には少し懸念もあつたが、晴れさへすればと、好い加減な事を賴みにしてとう〳〵阿蘇の社迄は漕ぎつけた。

白木の宮に禰宜の鳴らすかしはでが、森閑と立つ杉の梢に響いた時、見上げる空から、ぽつりと何やら額に落ちた。饂飩を煮る湯氣が障子の破れから吹いて、白く右へ靡いた頃から、午過は雨かなとも思はれた

雜木林を小半里程來たら、怪しい空がとう〳〵持切れなくなつたと見えて、梢にしたゝる雨の音が、さあと北の方へ走る。あとから、すぐ新しい音が耳を掠めて、翻る木の葉と共に又北の方へ走る。碌さんは首を縮めて、えつと舌打をした。

一時間程で林は盡きる。盡きるといはんよりは、一度に

悠々
しまふ。
かへて

阿蘇の社　官幣大社阿蘇神社、熊本縣阿蘇郡宮地町字宮園にあり。
森閑

消えるといふ方が適當であらう。貫いて來た一筋道の外は、東も西も茫々たる青草が波を打つて、幾段となく連る後から、むく〳〵と黒い煙が持ちあがつてくる。噴火口こそ見えないが、煙のでるのは、つい鼻の先である。

林が盡きて、青い原を半丁と行かぬ所に、大入道の圭さんが空を仰いで立つてゐる。蝙蝠傘は疊んだ儘、帽子さへ被らずに、毬栗頭をぬつくと草から上へ突出して、地形を見廻してゐる樣子だ。

「おうい。少し待つてくれ。」

「おうい。荒れて來たぞ。荒れて來たぞうゝ。しつかりしろう。」

消える　茫々

「しつかりするから、少し待つてくれえ。」

と碌さんは一所懸命に草のなかを這ひあがる。漸く追ひつく碌さんを待受けて、

「おい何をぐず〳〵してゐるんだ。」

と圭さんが遣つつける。

「だから饂飩ぢやだめだといつたんだ。あゝ苦しい。——おい君の顏はどうしたんだ。眞黒だ。」

「さうか、君のも眞黒だ。」

圭さんは、無雜作に白地の浴衣の片袖で、頭から顏を撫廻す。碌さんは腰からハンケチを出す。

「なる程、拭くと、着物がどす黒くなる。」

一所懸命　這ひ　追ひ　ハンケチ Handkerchief.

「僕のハンケチも、こんなだ。」

「ひどいものだな。」

と圭さんは雨のなかに坊主頭を暴しながら、空模様を見廻す。

「*よなだ。よなが雨に溶けて降つてくるんだ。そらその薄の上を見給へ。」

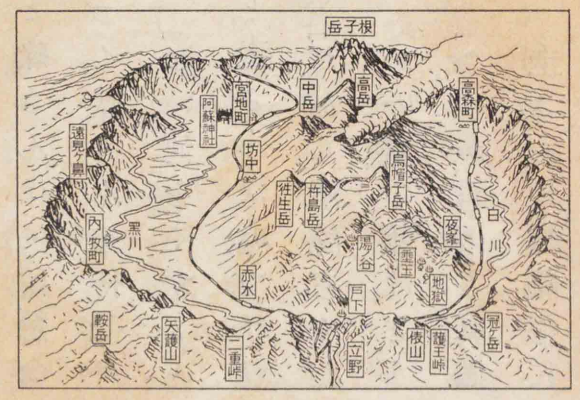
と碌さんが指をさす。長い薄の葉は一面に灰を浴びて、濡れながら靡く。

「なる程。」

「なあに大丈夫だ。つい困つたな、こりや。」

「なそこだもの。あの煙の出る所を

*よな　煤煙のこと。



阿蘇山

目當にして行けば譯はない。」

「譯はなささうだが、これぢや路がわからないぜ。」

「だから、さつきから待つてゐたのさ。こゝを左へ行くか、右へ行くかといふ、丁度股の所なんだ。」

「なる程、兩方とも路になつてるね。――然し煙の見當からいふと、左へ曲る方がよささうだ。」

「君はさう思ふか。僕は右へ行くつもりだ。」

「どうして。」

「どうしてつて、右の方には馬の足跡があるが、左の方には少しもない。」

「さうかい。」

と碌さんは體軀を曲げながら、蔽ひかゝる草をおし分けて、五六歩左の方へ進んだが、すぐにとつて返して、

「だめのやうだ。足跡は一つも見當らない。」

といつた。

「ないだらう。」

「そつちにはあるかい。」

「うん。たつた二つある。」

「二つぎりかい。」

「さうさ。たつた二つだ。そら、此所と此所に。」

と圭さんは繻子張の蝙蝠傘の先で、かぶさる薄の下に幽かに殘る馬の足跡を見せる。

繻子

天祐

一陣の風

むかう。

「これだけかい、心細いな。」

「なに大丈夫だ。」

「天祐ぢやないか。君の天祐はあてにならないこと夥しいよ。」

「なにこれが天祐さ。」

と圭さんがいひ終らぬうちに、雨を捲いて颯とおろす一陣の風が、碌さんの麥藁帽を遠慮なく吹込めて、五六間先迄飛ばして行く。眼に餘る青草は、風を受けて一度にむかうへ靡いて、見るうちに色が變ると思ふと、又靡き返して故の態に戻る。

「痛快だ。風の飛んで行く足跡が草の上に見える。あれ

を見給へ。」

と、圭さんが幾重となく起伏する青い草の海を指す。

青い草の海

「痛快でもないぜ。帽子が飛んぢまつた。」

「帽子が飛んだ？　いゝぢやないか帽子が飛んだつて。取つてくるさ。取つて來てやらうか。」

蠕動

圭さんはいきなり、自分の帽子の上へ蝙蝠傘を重しに置いて、颯と薄の中に飛込んだ。

鼻の先から出る黒煙は、鼠色の圓柱の各部が絶え間なく蠕動を起しつゝある如く、むく〳〵と捲きあがつて、半空から大氣の裡に溶込んで、碌さんの頭の上へ容赦なく雨と共に落ちてくる。

暫くすると、丸で見當の違つた半丁程先に、圭さんの首が忽然と現れた。

薄の中を泳ぐ

「帽子は無いぞう。」

「帽子はいらないよう。早く歸つてこうい。」

圭さんは坊主頭を振立てながら、薄の中を泳いでくる。

濛々と天地を鎖す秋雨を突抜いて、百里の底から沸騰る濃いものが渦を捲き、渦を捲いて幾百噸の量とも知れず立ちあがる。その幾百噸の煙の一分子が悉く震動して、爆發するかと思はるゝ程の音が、遠い遠い奥の方から、濃いものと共に頭の上へ躍りあがつて來る。

眉を攢む

雨と風とのなかに、毛蟲のやうな眉を攢めて、餘念もなく

眺めて居た圭さんが、非常な落ちついた調子で、

「雄大だらう、君。」

といつた。

「全く雄大だ。」

と碌さんも眞面目に答へた。

「おそろしい位だ。」

暫く時をきつて、碌さんが附加へた言葉はこれである。

「僕の精神はあれだよ。」

と圭さんがいふ。

圭さんはのつそりと踵をめぐらした。碌さんは默然として尾いて行く。空にあるものは、煙と雨と風と雲とであ

る。地にあるものは、青い薄と女郎花と所々にわびしく交る桔梗のみである。二人は茫々として無人の境を行く。

薄の高さは腰を沒する程に延びて、左右から、幅、尺足らずの路を蔽うてゐる。身を横にしても、草に觸れずに進む譯にはいかぬ。觸れれば、雨に濡れた灰がつく。圭さんも碌さんも、白地の浴衣に、白の股引に、足袋と脚絆だけを紺にして、濡れた薄をがさつかせて行く。腰から下はどぶ鼠のやうに染まつた。腰から上と雖も、降る雨に誘はれて着くよなを一面に浴びながら、殆ど下水へ落込んだと同樣の始末である。

圭さんは雲と煙の這廻るなかへ、猛然として進んで行く。

茫々
無人の境

猛然

碌さんは心細くも只一人薄のなかに立つて、頼みにする友の後姿を見送つてゐる。暫くするうちに、圭さんの影は草のなかに消えた。

大きな山は五分に一度位づつ、時をきつて平常よりは烈しく轟となる。その折は雨も煙も一度に揺れて、餘勢が横なぐりに、悄然と立つ碌さんの體軀へ突當るやうに思はれる。草は眼を走らす限りを盡して悉く煙のなかに靡く上を、さあ〳〵と雨が走つて行く。草と雨の間を、大きな雲が遠慮もなく這廻る。碌さんはむかうの草山を見詰めながら、顫へてゐる。よなのしづくは碌さんの下腹迄浸み透る。毒々しい黒煙が長い渦を七巻まいて、むく〳〵と空を突く

悄然

顫へて

途端に、碌さんの踏む足の底が地震のやうに撼いたと思つた。

草のなかに立つて碌さんがおぼつかなく四方を見渡すと、むかうの草山へぶつかつた黒雲が、峰の半腹でどつと崩れて、海のやうに濁つたものが頭を去る五六尺の所迄押寄せてくる。時計はもう五時に近い。山のなかでは、たゞさへ薄暗くなる時分だ。ひゆうひゆうと絶え間なく吹きおろす風は、吹く度に黒い夜を遠い國から持つてくる。刻々に逼る暮色のなかに、嵐は卍に吹きすさむ。噴火口から吹出す幾萬斛の煙は、卍のなかに萬遍なく捲込まれて、嵐の世界をつくして、どす黒く漲り渡る。

―「漱石全集」―

絶え間

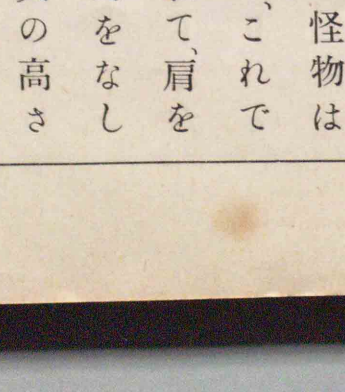
一三　足元の用心

和田垣謙三
兵庫縣の人、法學博士、東京帝國大學教授、大正八年歿、年六十。

兆殿司
俗名、明兆吉山、淡路の人、畫僧、京都東福寺の殿司、永享三年歿、年八十。
泰然自若
佇む

兆*殿司がその鄉里淡路鹽屋村西來寺の雛僧たりし時、某所に使に行き、薄暮歸り來たりし途上、大入道に出會ひぬ。然るに、後にあれ程の名人になりたる少年の事とて、泰然自若、そしらぬ顏にて寺の方へと急ぎぬ。鹽屋橋に差掛りしに、橋の袂に草刈籠を擔ひし一人の村老佇み居りて、「おい小僧さん、途で何か變化な者に會はなかつたか。」と問ふ。「あゝ今しがた入道に會つたよ。」と平然として答ふれば、草刈老爺は見る間に一丈餘の大入道となり、「この位大きかつたか。」と威丈高になりて、殿司を瞋み付けぬ。殿司少しも驚かず。

「いやもう少し大きかつた。」といへば、怪物は更に一丈ばかりも高くなりて、「こんなか。」と問ふ。「もつともつと。」と答ふれば、「そんなら、こんなか。」とて、今度は三丈餘にもなりぬ。「まだ、まだ。」と殿司は平氣なり。怪物は猶一層高くなりて、「こんなか、これでもまだか。」と眼を睜り、眉を皷て、肩を怒らせ、口を開き、物凄き態度をなしながら、延び延びて、遂に數丈の高さとなりぬ。殿司ふと足元を窺ひしに、その肉、身丈の方にられたる爲に、兩脚は麻幹の如く細まり、又手も口も今や數丈の上にありて、噛みつく事も、攫む事も出來ざれば、殿司は



兆殿司

悠然として、腰に提げたる繪具箱より小剪刀を取出し、怪物の兩脚をぽきゝと切りたり。

怪物は何條以てたまるべき、どすんどすんと地響打つて倒れたるが、足は鹽屋橋の際に横たはり、頭部は洲本の川口にありけりと語り傳ふ。

さて讀者は眉に唾をしつゝ、この一篇を讀みしならんが、文字以上、文字以外に何ものかを捕捉し得れば可なり。とかく氣位ばかりばかに高くなり、肝腎の足元の用心を闕きて得意滿々たる一刹那、どたん、どすんと倒るゝもの、世にその例少なからざるを思へば、この怪談も萬更無用の辯にはあらざるべし。

（「兎糞錄」）

眉に唾す

得意滿々

思へば

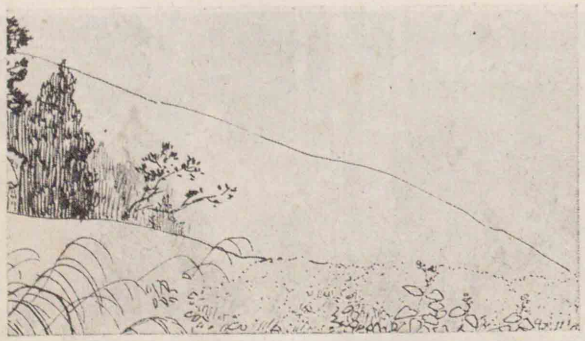
島木赤彦

本名、久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十一。

一四　お山の行者

谿のあひだに
花さいて
蕎麥の畑が
眞白い

山の上まで
木が立つて
杉の林が
まつ暗い

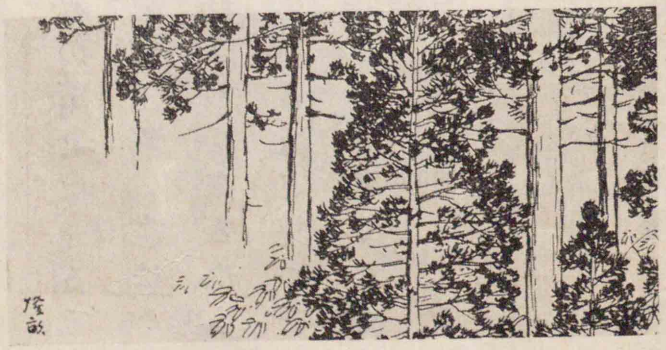


島木赤彦

とほり

お山へのぼる
行者さん
そばの畑を
とほり越す
そばの畑は
二三枚
杉の木立の
はてがない
杉の林に
雲が湧く

雲の中から
鈴が鳴る
行者の腰に
なる鈴は
だん〳〵のぼつて
聞えない
雲の中から
日がさして
そばの畑が
まつ白い



—「赤彦童謠集」—

一五　雀

北原白秋
名は隆吉、福岡縣の人、詩人、明治十八年生。
草舍

庭の澁柿が赤く色づく頃から、私の草舍はまるで雀のお宿みたやうになつて了ひます。葛飾田圃の雀は、その赤い澁柿ばかりを目がけて、四方から群がつて來るやうです。

さうして澁柿が腐つて落ちれば落ちるほど、集つて來る雀の數は愈〻多くなるばかりです。寒さも愈〻寒くなつて、後にはたつた一つしか赤い實は殘つてゐないやうになると、今度は雀が鈴なりになつて了ひます。

人家の傍の田を作るものではないといふ話です。見渡す限りの稻の穗波が愈〻黃金色に色づいて、晩秋の風にさわ

鈴なり

さわとゆれたつ頃になると、所謂千羽雀の時節になります。その雀の數の多いことは、千羽雀と言つても、千羽ぐらゐの數ではありません。何千何萬とも知れぬ雀の群集が、彼方にも此方にも、黑胡麻のやうに亂れも、黑胡麻のやうに亂れ落ちたり、飛び上つたり、遙かの空から稻の穗波とすれ〳〵に、金色に光つて、羽ばたき羽ばたき亂れて來るかと思ふと、思ひがけない近くの田圃からまた入れ變りに擾れたつて逃げたり、又は向ひ風に專念に羽ばたく雀、激し

黑胡麻のやうに亂れ落ちる

專念

白秋と雀　（岡本一平筆）

く吹きわけられて二羽三羽と方々へそれて、向き向きに頭をちゞめて羽ばたく雀、たつた一羽になつて、翼を細かにちぎれるほど振りきつて、何處へ行くとも知れず小さく飛んでゆく雀、さういふものが、唯の一羽でも鳴きたてぬのはないのだから、その騒しさ喧しさといつたらないのです。取りわけて、赤い赤い太陽が、本所邊の濛々と煙つてゐる幾百とも知れぬ大煙突の向うに落ちかゝつて、西方一面にさむざむと赤く反照する日の暮れ時の群雀のかしましさは、全く耳がかな聾になるばかりです。百姓の方でも堪らなくなつて、ほう〳〵と田圃へ出て追つてはゐますが、その聲の寂しいことといつたらありません。追はれる雀は悧巧で

かしましさ
かな聾
ほう〳〵

す。自分たちの下りてゐる田から一番近い家の庭の樹立を目がけて、逃げて來るのです。ぼう〳〵と羽音をたてて、まるで驟雨の襲つて來るあわたゞしさで、一時に逃げて來ます。

驟雨

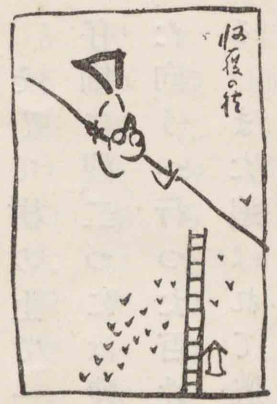
そして樹の上で一しきり鳴騒ぎながら、一つには樣子を仔細に觀、二つには疲れを休めて、新しい元氣をつけると、また向うへ行つた百姓の後から、元の田圃へ一齊に飛びおりる。また追はれて逃げて來るといふ風です。それが朝から晩までだからたまりません。逃げ場所のある家の近くの田圃などは、一番に荒されて了ふわけです。

仔細

この時節こそ雀の一番の收穫時であつて、雀は全く欣喜

欣喜雀躍

雀躍です。少々遠くの都會からでも、この頃は晝は總出で出稼ぎに來ます。葛飾でなくとも、田圃があるかぎり、雀はそこらの電線や木の上に鈴なりです。



雀（白秋筆）

赤い夕燒の空に、火の見梯子が遠見に染り、近くの電線に、雀が尻上りや肱立てをやつたり、まるで器械體操か輕業みたやうな身振で、前後も知らずに踊つてゐます。

愈、寒い冬の日が近づくと、道端に架けわたした掛稻の上にも、何羽となく雀が日向ぼつこをはじめます。村社の壞れかけた石の鳥居や、色の寂びた赤い鳥居にも、稻束がかけ

連ねてあるその上にも、雀が行儀よく一列に竝んで、刈りつくして廣々となつた田圃續きを眺めたり、落穗拾ひの寒げな姿を見下したり、遙かに天の一方に眞白くなつた富士の山の神々しさを仰いだりしてゐます。

ともすると、非常によく晴れた日などは、小高みの丘の祠の千木のてつぺんに、一羽の雀がちよんと留つて、日和見をしてゐる澄みきつた姿さへ見受けます。さうして幾日か寒い日が續くと、いよ〳〵霙まじりの粉雪が降つて來ます。さうして百姓もちゞかめば、雀もちゞかんで、何時の間にやら自然とお爺さんくさくなつて了ふのです。

耕作車の車輛を二つともはづして、背戸の檜垣に立てか

けてあると、夜の中においたか、夜明けには霜で眞白くなつてゐます。その車輛の霜の上にも、雀が珍らしさうにとまつたり、つゝいてみたり、蔭の黍がらの霜の上に飛びおりたりしてゐます。かういふ景色も冬のわびしさです。

とにもかくにも、雀と百姓との親しさは、全くびつたりとしたものです。寸分の隙もありません。

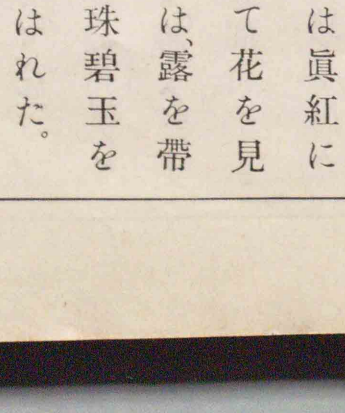
—「雀の生活」—

一六　原始林の時雨

國木田獨歩

宿の子のまめ〳〵しきが先に立ちて、明くれば九月二十六日朝の九時、愈〻*空知川の岸へと出發した。

陰晴定めなき天氣、薄き日影洩るゝかと思へば、忽ち峰より霧起りて、峰をも林をも路をも包んでしまふ。山路は思ひしより樂にて、余は宿の子と樣々の物語しつゝ身も心も輕く歩いた。



國木田獨歩

林は全く黃ばみ、蔦紅葉は眞紅に染りて、霧起る時は霞を隔てて花を見るが如く、日光直射する時は、露を帶びたる葉毎に幾千萬の眞珠碧玉を連ねて、全山燃ゆるかと思はれた。

宿の子は空知川沿岸に於ける熊の話をなし、續いて彼が子供心に聞集めたる熊物語の幾種かを熱心に語つた。坂を下りて、熊笹の繁れる所に來ると、彼はちよつと立止まり、

わびしさ

國木田獨歩　名は哲夫、千葉縣の人、文學者、明治四十一年歿、年三十八。

空知川　北海道空知郡の山中に發し石狩川に入る。

「聞えるだらう。川の音が。」と耳を傾けた。「そら——聞えるだらう。あれが空知川。もう直ぐ其處だ。」

「見えさうなものだ。」

「どうして見えるものか。森の中に流れてゐるのだ。」

二人は、頭を沒する熊笹の間を僅かに通ふ帶ほどの徑を暫く行くと、一人の老人の百姓らしきに出遇つたので、余は道廳の出張員がゐる小屋を訊ねた。

「この徑を三町ばかり行くと、幅の廣い新開の道路に出る。その右側の最初の小屋にゐなさるよ。」といひ捨てて、老人は去つて了つた。

歌志内を立つてから此處までの間に、人に出遇つたのは

開墾者
密茂
拓殖
異樣

この老人ばかりで、途中又小屋らしき物を見なかつたのである。余はこの老人を見て、空知川沿岸に既にいくらかの開墾者の入込んでゐることを、事實の上に知つた。

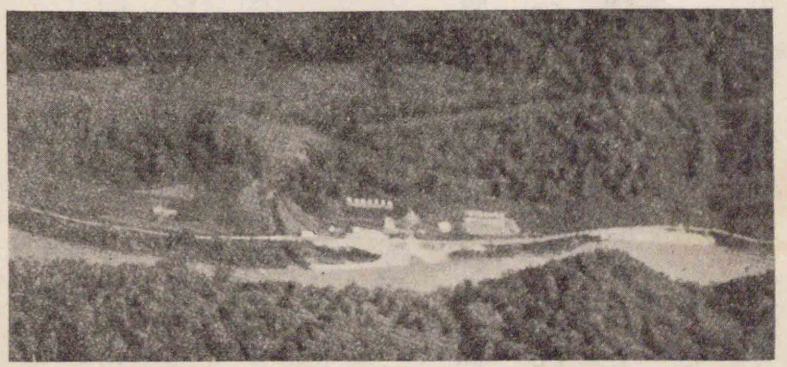
熊笹の徑を通りぬけると、果して思ひがけない大道が、深林を穿つて一直線に造られてゐる。その幅は五間以上もあらうか。然も兩側に密茂してゐる林は、二丈を越え三丈に達する大木が多いのだ。この幅廣き大道も、掘割を通ずる鐵道線路のやうであつた。然し余はこの道路を見て、拓殖に熱心なる道廳の經營の、如何に困難多きかを知つたのである。見れば、この道路の最初の右側に、內地では見ることの出來ない異樣なる掘立小屋がある。小屋の左右及び

後背は林を倒して、二三段歩の平地が開かれてゐる。余は首尾よくこの小屋で、道廳の役人某に會ふことが出來た。

談してゐると、突然ばら〳〵と音がして來たので、余は外に出て見ると、日は薄く光り、雲は靜かに流れ、寂たる深林を越えて時雨が過ぎゆくのであつた。

余は宿の子を殘して、一人この邊を散歩すべく小屋を出た。げに怪

越え。



北海道の原始林

しき道路よ。これ千年の深林を滅し、人力を以て自然に打克たんが爲に、殊更に無人の境を選んで造られたのである。見渡す限り、兩側の森林これを覆ふのみにて、一箇の人影さへなく、一縷の輕煙さへ起らず、一の人語さへ聞えず、寂々寥寥として横たはつてゐる。

寂々寥々

余は時雨の音の淋しさを知つてゐる。然し未だ曾て原始の大深林を忍びやかに過ぎゆく時雨ほど淋しさを感じたことはない。これ實に自然の幽寂なる私語である。深林の底にゐて、この音を聞く者、何人か生物を冷笑する自然の無限の威力を感ぜざらん。怒濤・暴風・疾雷・閃電は自然の

幽寂

虚喝

虚喝である。

俯瞰　彼の威力の最も人に迫るのは、彼の最も靜かな時である。

高遠なる蒼天の何の聲もなく、たゞ默して下界を俯瞰する

る時、曾て人跡を許さざりし深林の奥深き處、一片の木の葉

欠伸　の朽ちて風なきに落つる時、自然は欠伸して曰く「あゝ、我が

刹那　一日も暮れんとす。」と、而して人間の一千年はこの刹那に飛

びゆくのである。

余は兩側の林を覗きつゝ行くと、左側で林のやゝ薄くな

つてゐる處を見出した。下草を分けて進み、ふと顧みると、

この身は何時しか深林の底にゐたのである。とある大木

の朽ちて倒れたるに腰をかけた。

林が暗くなつたかと思ふと、高い枝の上を時雨がさらさ

らと降つて來た。來たかと思ふと間もなくやんでしんと

して、林は靜まりかへつた。

余は暫くぢつとして、林の奥の暗くなつてゐる處を見て

ゐた。

一七　ふれ〳〵粉雪

新村　出

中古の童謠に「ふれ〳〵粉雪」といふ一句だけ傳つてゐるのがあります。これは今から八百年ほど前に御在位になつた鳥羽天皇が、當時の童謠をお口ずさみになつたのを、御乳母の讃岐の典侍がその日記に書きのこしておいたのです。

天皇はその時、御歳六つであらせられました。御卽位

新村　出　靜岡縣の人、文學博士、京都帝國大學敎授、明治七年生。

鳥羽天皇　第七十四代。

讃岐の典侍　堀河・鳥羽の兩朝に仕へし女官。

―「獨歩全集」―

前年　嘉承二年。
翌年　天仁元年。

意表に感ず　讃岐典侍日記　堀河天皇の御惱の頃より鳥羽天皇の御即位の頃迄のことを記したる日記。

昨年　大正十年。

ゆかしく　兼好法師　姓卜部、山城國の人、文學者、歌人、正平五年寂、年六十八。

になつたのは前*年の十二月一日でしたが、歳明けて翌*年の正月二日の朝、御乳母が御前に出たところに、雪がこん〳〵降つてゐたをりに、御幼年の鳥羽天皇は、あの童謡をおうたひになつて、興がつておいでになりました。さすがの乳母の典侍も少し意表に感じたといふことですが、その話は讃*岐典侍日記の下巻にかきとめてあります。昨*年あたり澄宮様が、かず〳〵の童謡をお作りになつて、お示し下さつたことと思ひあはせて、誠にゆかしく又うれしく覺え奉ることであります。日本の童謡の歴史中でも、この上もない味ひのある逸話だと考へられます。この童謡は、それから二百五十年ばかりの後の兼*好法師の時代にも、まだ京都邊で

徒然草　兼好の隨筆。

斷片

轉訛

俚諺集拾遺　高野斑山、大竹紫葉共編、大正四年刊。

は口にされたと見えまして、徒*然草の百八十一段に、やはりそれの斷片を載せてあります。そこには「ふれ〳〵こゆき、たんばのこゆき。」としてあつて、「たまれ粉雪。」といふのを、「丹波のこゆき。」と訛つたのであると解釋してあります。「垣や木のまたに。」とある文句が、その後につくやうになつてゐますが、全體の童謡は錄してありません。どうせ短い形であることは勿論です。どこかに今でも全形が多少の轉訛はあつて、遺つてゐはしないかと思ひます。「俚*諺集拾遺」を見ますと、京都の童謡でかういふのが載つてをります。

雪やこん〳〵、霰やこん〳〵、お寺の松の樹にいつぱい積りこん〳〵

こほり

いくらか昔の文句の面影がかよつてはゐるやうです。關東でも、以前、これと同じ句調か文句のが聞けたとおぼえてゐます。私どもの小さいときには、「ゆきやこほり、おべたいこほり。」とか何とかいつた言草を、謠つたやうな氣がしますが、こんな童謠もだん〳〵影をかくしてしまひさうで、なつかしくてたまりません。

もう一つ雪の童謠を出します。やはり京都に、雪の降る日に空を仰ぎながら、兒童が、

雪ばな散るはな、空に蟲が涌くはな、扇腰にさいて、きりゝと舞ひましよ

と謠ふさうです。俚謠集拾遺にさう錄してあります。「空

謠ふ。

近世趣味

に蟲がわくはな。」とは少し面白くない文句ですが、末句のひきしまりかたもよくて、いかにも江戸時代の近世趣味がうかぶ心地がします。

今度はうめあはせに熱い方の文句ですが、「京の京の大佛さんは、天火（てんび）でやあけてなあ、三十三間堂がやあけ殘つた、ありやどん〳〵〳〵、こりやどん〳〵〳〵。」といふ文句を京都の街の子供が謠ふのを聞きます。大へん調子のよい謠です。私たちのやうな歷史ずきには、慶長七年十二月の大佛殿炎上のことが想ひ出されて、豐國（とよくに）祭だの、大佛殿再建だのと、それからそれへと追懷させられます。また時候のよい頃の夕がたに、街の片わきや軒下などで、一群の子供が寄り

炎上

豐國祭

京都市下京區別格官幣社豐國神社の祭禮。

追懷

集つて、その中でひとり鬼が眼をかくして背を向けてゐると、輪をなした群では、立ち場所をいろ〳〵變へながら、「でんこでんこ。」と呼びかける鬼に對し、「だれの次にはだれが居る。」と節をつけていふ。鬼が當てそこなふと、「どつこいすべつて橋の下。」と合唱するのが、東京から移住した私たちには非常に珍らしく感じられて、しば〳〵立留つては耳をかたむけたものです。十數年來何だかすたれ氣味になつたと思ひます。これは童謠とはいへませんが、殘しておきたい遊戲だと考へます。「こをとろ、ことろ。」の遊戲にしろ、「こゝはどこの細道ぢや。」の文句にしろ、幼時自分たちが東京で遊んだり又聞いたりしたものであると、一層いひ知れぬなつかしさに絆されます。女の兒たちが「天神樣の細みちぢや。」「ちいつと通して下さんせ。」などといふ掛けあひの文句は、今だに耳について、思ひうかべるとしみ〴〵昔がこひしくなります。

そこなふ

絆さる

澁川玄耳
名は柳次郎、別號藪野椋十、東京朝日新聞記者、大正十五年歿、年五十五。

珍重

垂仁天皇
第十一代。

一八　かうばしい果物

澁川玄耳

—「南蠻更紗」—

我が國には、もと蜜柑の類は無かつた。何時もかうばしい果物だといふので、「不時香果（ときじくのかぐのこのみ）」と非常に珍重がられた。垂*仁天皇の時、南洋の或島に、この美しい旨い果物が有るといふことが聞えたので、天皇は田道間守といふ航海に長けた人を選んで、南洋の視察をかねて珍らしい果物を取つて來

渺茫

るやうにお命じになつた。

この名譽ある選抜を蒙つて、田道間守は大いに喜んで、堅固な舟を造り、澤山の食料を積込み、達者な水夫を募つて、十分の支度を整へた。北風のそよ〳〵と吹く日に帆を揚げると、忽ちに渺茫たる大洋に乘出した。南へ南へと走りつゞけて、十日たち一月たつうちに、段々貯への飲食物も乏しくなつた。或は雨水を受けて飲んだり、或は海の魚を捕つて食つたりして、饑渇を凌ぎながら屈せずたゆまず航海を續ける。島影を見れば、

田道間守（菊池容齋筆）

直ちに船を寄せて上陸して見るけれども、椰子や芭蕉は茂つてゐるが、肝心の蜜柑の樹は見つからない。しかたが無いから、糧食や飲料水などを積込んでは船を出し、又あてどもなく大洋を走り廻つて、島といふ島は見つかり次第に探檢する。

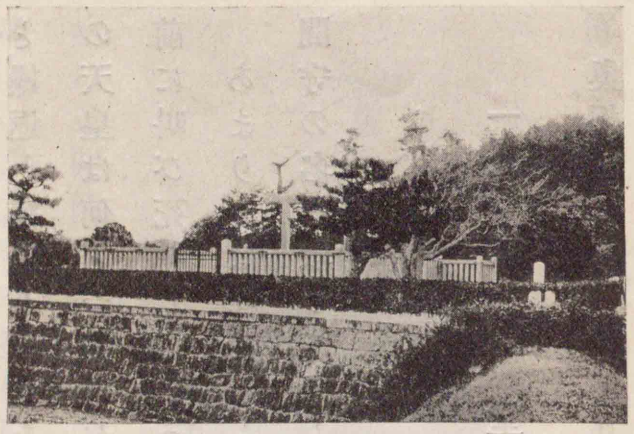
かうして幾年か萬里の波上に漂うてゐたが、遂に常世の國といふ大きな島に着いて、とう〳〵噂に聞いた蜜柑の林を發見した。枝もたわゝに百千の黃金のやうな實が生つてゐる有樣は、譬へやうもない美しさである。試みに喫つて見ると、桃にも、柿にも、葡萄にも、比べやうのないかうばしい匂、旨い肉、旨い汁である。長い船路の疲も癒えて、鬱した

常世の國
たわゝに

胸も開き、曇つた心も晴れる。いかなる病も立所に消えて、壽も延びるやうな味である。眞に我が天皇のお求めになる不思議の果物だと、感心もし喜びもして、實を取り、葉も取り、枝も取つて、積まれるだけ船一杯に積込んで、早速この島を離れ、一刻も早く日本に歸つて天皇に獻上しようと、船を出した。

この度は北へ北へと走つたのだが、何千里とも知れない廣い大洋であるから、いくら氣はあせつても、風や浪は思ふまゝにはならぬ。歸りにも亦幾年かかゝつて、往復十年でやう〳〵日本に到着した。いざ天皇の御感に預らうと喜び勇んで上陸して見ると、かなしいかな、天皇は既にお崩れ

御陵　奈良縣生駒郡都迹村にあり。ひれ伏す



垂仁天皇御陵

になつて、最早幾年かたつてゐたのであつた。

田道間守の失望はいはうやうも無い。困難が多かつただけ殘念さも多い。折角長の年月の苦心も水の泡になつたかと思ふと、殘念で堪らない。男泣きに泣いて、天皇の御*陵の前に、山の如くに蜜柑を積上げて、その前にひれ伏して、

「常世の國のかうばしい果物、あなたの仰せに從つて參りました、此處に持つて參りま

あかうばしい果物、取つて

した、あゝ我が君。」

と、繰返し繰返し涙聲を張上げて申しあげるけれども、地中の天皇は何とお答へが有らう。とう〳〵そのまゝ御陵の前に叫び死をして了つた。

あまりあはれな事とて、日本に初めてのこの果物に、田道間守の名を取つて、橘と名を命けることになつた。

―「古事記噺」―

一九　甲冑堂

橘南谿

奥州白石の城下より一里半南に、才川といふ驛あり。この才川の町末に高福寺といふ寺あり。奥州筋近年の凶作に、この寺も大破に及び、住持となりても食物とぼしければ、僧も住せず、明き寺となり、本尊さへ何方へ取納めしにや、寺には見えず。庭は草深く、眞に狐梟のすみかといふも餘りあり。

この寺中に又一つ小堂あり、俗に甲冑堂といふ。堂の書付には故將堂とあり。大きさ僅かに二間四方ばかりの小堂なり。本尊さへ右の如くなれば、この小堂の破損はいふまでもなし。やう〳〵縁にあがり見るに、内に佛とても無く、たゞ婦人の甲冑して長刀を持

橘南谿
名は宮川春暉、伊勢の人、醫を業として京都に住み、海内を漫遊す、文化三年歿、年五十三。
凶作

橘南谿木像

ちたる木像二つを安置せり。いかなる人の像にやと尋ぬるに、佐藤繼信・忠信二人の妻なりとかや。その昔、義經、*鎌倉殿の義兵をあげ給ふを聞き、*秀衡に暇乞して鎌倉へ赴き給ふ時、*佐藤庄司、我が子の繼信・忠信を御供に出せり。その後義經京都へ攻めのぼり、平家を追擊し、一谷・屋島などにて、さばかりの大功をたて給ひて、再度奥州へ來たり給ひし時、始め附きしたがひて出でたりし龜井・片岡など、皆無事にて歸國せしに、繼信は壇浦にて*能登殿の矢先にかゝり、忠信は京都にて義の爲に命をおとし、兄弟二人とも他國の土となりて、形見のみかへりしを、母なる人かなしみ歎きて、無事に歸り來たる人を見るにつけて、せめては一人なりとも、この人

鎌倉殿　源頼朝のこと。
秀衡　藤原秀衡、鎭守府將軍、奥、羽二州の太守。
佐藤庄司　名は基治、奥州信夫郡の庄司。
能登殿　能登守平教經のこと。

そひし　希代　そゞろに

人のごとく歸りなばなど泣沈みぬるを、兄弟の妻女その心根を推量し、我が夫の甲冑を着し、長刀を脇ばさみ、勇ましげに出立ち、只今兄弟凱陣せしと、その俤を學びて老母に見せ、その心をなぐさめしとぞ。その頃の人も二人の婦人の孝心あはれに思ひしにや、その姿を木像に刻みて殘し置きしとなり。

嗚呼、兄弟の人は古今ためしすくなき忠義武勇の士なりその人につれそひし婦人も亦希代の孝女にて、夫婦忠孝の勝れしも世に珍らしき事なり。余この物語を聞き、この像を拜して、そゞろに落涙せり。かくばかり人の鑑ともなるべき孝婦の像の、かく荒れはてたる小堂に、雨風をだに防ぎ

かねて彩色も落失せ、僧だに守らで、香花を供する人もなく、年月に荒れゆき、遂に跡かたもなくなりはて、これ等の事をも語り傳ふる人もなくならんかと、あまりにあはれに覺えしかば、委しく書きつけて歸れり。

—「東遊記」—

吉村冬彦

二〇　海外だより

一　*ブェニスからお寺の鳩に豆を買つて遣るのは、日本に限ることと思つて居ましたが、此處の*サン＝マルコのお寺の前でも同じことをやつて居ます。但し豆ではなくて、玉蜀黍を細長い圓錐形の紙袋につめたのを賣つて居ます。

大道で鍋を煮立たせて、茹章魚を賣つて居ます。ブェニスの町は朽汚れて居るが、それは美しく朽汚れて居るので、壁の剝がれたのも、乃至は窓からぶら下げた洗濯物迄も、悉く云ふに云はれぬ美しくくすんだ好い色彩を示して居ます。霜枯れ時だのに、美しい常磐木の綠と、青玉のやうな水の色とが、古びた家の黃や赤や茶によくうつります。

*ゴンドラも面白く、貧しい女も美しく見えます。

ブェニス

吉村冬彦
本名寺田寅彥
高知縣の人、理學博士、東京帝國大學教授、明治十一年生。

ブェニス
Venice.
イタリヤ北部の都市。

サン＝マルコ
San Marco.
圓錐形

ゴンドラ
Gondola.
イタリヤ特有の小舟。

ローマ　Roma. イタリヤの首府。
廢墟
アルバノ　Albano.
ロッカ＝ヂ＝パパ　Rocca di Papa.
オリーブ　Olive. 橄欖。

二

ローマから

ローマへ來て累々たる廢墟の間を彷徨して居ます。今日市街を離れて、アルバノの湖からロッカ＝ヂ＝パパへ古い火山の跡を見に參りました。到る處の山腹にはオリーブの實が熟して、其の下には羊の群が遊んで居ます。山路で、大原女の樣に頭の上へ枯枝と蝙蝠傘を一緒に束ねたのを載つけて、靴下をあみながら歩いて來る女に會ひ

バチカン　Vatican. ローマ法王の宮殿。
シャモニ　Chamonix. モンブラン山麓の村。
スイス　Switzerland.
アルプス　Alps.
モンブラン　Mont Blanc. アルプスの最高峯、四千一〇メートル。

ました。角の長い牛に材木車を牽かせて來るのもあれば、驢馬に炭俵を積んで來るのもあります。

の木もあれば、竹もあります。

眼と髮の黑い女が水溜のまはりに集つて、洗濯をして居る傍には、鷄が群遊び、豚が路傍で啼いて居ます。

バチカンも一部見ましたが、此處の名物は旨い物ばかりの樣であります。

三

シャモニから

今度の旅行中は天氣の惡い日が多くて、殊にスイスでは雨や霧の爲にアルプスの雪も見えず、割合につまりませんでした。それでもモンブランの氷河を見に

氣溫

ガイド Guide. 案内者。

辻る

行つた日は、天氣が好くて面白う御座いました。

寒暖計を一本下げて、氣溫を測つたりして歩きました。鶴嘴の様な杖をさげて、繩を肩に擔いだ案内者が、英語で「*ガイドは入らぬか。」と云ふから、「お前は英語を話すか。」と訊くと、「いゝえ。」と云ひました。

辻らない用心に靴の上へ靴下を穿いて、一人で氷河を渡りました。好い心持でした。氷河の向側は嶮しい

モンブランとシャモニ村

タブァン Tavern. 居酒屋。

メロヂアス Melodious. 旋律的。

路で、高山植物が岩の間に花を綴り、所々に瀧がありま す。此處から谷へ下りる途中に、小さな*タブァンといつた様な家の前を通つたら、後から一人追つかけて來て、「お前は日本人ではないか。」と訊きますから、「さうだ。」と答へたら、「私は英人ですが、日本には八年間も居て、あらゆる高山へ登り、富士へは六回登つたことがある。」と話しました。其の細君は宿屋の前の草原で、靴下を編んで居ました。其處から谷底へ下りて、シャモニ村まで歩きましたが、道端の牧場には首に鈴をつけた牛が放し飼ひにしてあつて、其の鈴の音が非常に*メロヂアスに聞えます。又番人の子供や婆さんも本當に繪のや

うで愉快でした。日本にもある樣な秋草が咲いて居たり、踏切番の小屋に菊が咲いて居たり、路傍のマ*リヤの御堂に花が供へてあるのも見ました。

シャモニの村へ這入る頃には、もう日が暮れかゝつて、眞紅な夕陽がブ*ゾンの氷河の頂を染めた時は、實に綺麗でした。村の町には、名物の瑪瑙細工やら牛の角細工を竝べた店ばかり連つて、斯ういふ處にはお極りのキ*ネマが自動ピ*ヤノで客を呼んで居ました。巴里邊りから來て居るらしい派手な服裝をした女が散歩して居ました。

―「藪柑子集」―

マリヤ　Maria.
供へて
ブゾン　Boissons.
瑪瑙
キネマ　Kinematograph.
ピヤノ　Piano.

二一　秋冬の句評釋

河東碧梧桐

がつくりとぬけそむる齒や秋の風　杉*風

（釋）「がつくり」は齒の拔ける時の音及び感じで、「ぬけそむる齒」といふので、其の作者の老境に入つたのを現してゐる。秋の風の吹く頃齒がぬけそめたと、暗にその年寄つたのを自覺するさまを述べてゐるのである。

（評）齒に對して「がつくり」といふ形容は一語千金の價ありて、よくその場合を判然せしめ、且讀者にも、切實にその感じを傳へる。これが中七字とか下五字とかにありては、それほどでもないのであるが、上五字に置いてあるので、益〻その

河東碧梧桐
名は秉五郎、松山市の人、俳人、明治六年生。

杉風
姓は杉山、三河國の人、芭蕉の門人、享保十七年歿、年八十六。

一語千金

意味を強める。「ぬけそむる齒や秋の風。」の「齒や」から「秋の風」とつゞく鹽梅が、卽ち俳句の句法である。齒の拔ける感じと秋風とは到底動かない配合で、老人の容姿眼前に躍如として現れる。

百舌鳥鳴くや入日さしこむ女松原　凡兆*

（釋）百舌鳥が鳴いてゐるその女松原に、入日がさしたといふ純客觀の句である。松に雄松・雌松といふ二種ある、その雌松の方で、幹の赤みを帶びた葉のこまかいので、直ぐ判別がつく。

（評）百舌鳥といふ猛禽に對する稍壯大な景色で、幹の赤い所に入日のさしこんだのも、自然の調和を保つてゐる。

鹽梅
躍如
凡兆　奉華園と號す、加州金澤の人、芭蕉の門人、正德四年歿、享年未詳。
純客觀

月見せん伏見の城の捨郭　去來*

（釋）伏見の城はもと豐太閤の築く所であつたが、關が原の戰爭以來荒廢に歸してしまつて、たゞ外廓位が殘つたばかりであつた。それを「捨郭」といふので「郭」は「廓」の事、すてぐるわと讀む。

その伏見の城跡で月見をしようといふのである。

（評）單に伏見の城跡で月見をしようといふ意ではあるが、それが「伏見の城跡の月見かな。」とか何とかいふ風に言はないで、最初に「月見せん。」と事實を置き、後に「伏見の城の捨てぐるわ。」とその月見の場所の光景を敍したのが、この句の働きのある所で、餘程餘裕のある句である。

去來　姓は向井、肥前國の人、芭蕉の門人、寶永元年歿、年五十四。

一色も動くものなき霜夜かな　　野*水

野水　姓は岡田、尾張國の人、芭蕉の門人、寛保三年歿、年八十六。

（釋）霜夜は霜の降つた夜で、一面に見渡すかぎり萬物死んだやうな寂寞たる景色で、何一つ動くものもないといふのを、霜の白きに對して、一色もといつたのである。

寂寞

（評）霜といふのは一體稜峭な氣を帶びてゐるもので、雪とか雨とかいふよりも、けはしい感じがする。殊に霜夜といふには、風もなく、月もなく、雨もない天地肅然たる感を起す。その感じをこの句に現したので、作者の主觀であるが、その光景がよく盡されて居ります。

稜峭　けはし

天地肅然

主觀

一色の「色」の字が少し巧に失して、一歩を誤れば何の役にも立たない形容であるが、こゝでは中々力があります。正面から霜夜の感じを現したのは、恐らくこの句を空前絶後というても過言ではあるまい。

空前絶後　いうても

古寺の簀子も青し冬構へ　　凡兆

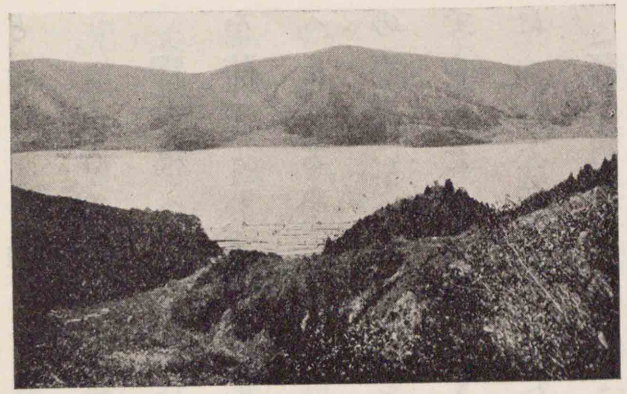
（釋）冬構へとは、冬になつたから、その用心をする事で、北風を防ぐとか、寒氣に犯されぬとか、その住居に對し種々の構へをする事。簀子は竹を編んだもので、こゝではすのこ縁の事をいふ。古寺の冬構への有樣で、常は干われた汚い縁であつたのが、新しく編みかへられた。卽ち青竹の最も眼につゐた所を寫したのである。

卽景

（評）この句は恐らく卽景であらう。冬構へにも、籬を結ひ直すの、屋根を修覆するのと、いろ〳〵あるが、その中で一番

路通　姓は八十村、美濃國の人、芭蕉の門人、歿年未詳。

眼につき易い簀子の青きを以てしたのは、古寺の平常に思ひ及して、その時の有樣があり〳〵と見える。



余吾の湖

鳥どもも寢入りてゐるか余吾の海　路通*

（釋）余吾の海は近江伊香郡にある湖水をいふのである。鳥どもも寢のである。もう水鳥も寢入るといふのは、水鳥が水の上に浮いて寢る事で、浮寢鳥といふ題もあるが、それをかくひき延べて言つたのも無理はない。作者が路通だけに、餘韻津々たる趣がある。

三界

餘韻津々

の冬の夜景を敍したのである。

（評）路通は乞食をして歩いた男であるから、それを知つてゐると「鳥どもも寢入つてゐるか。」といふ感情が尙適切に應へる心持がする。つまり三界に宿なしで、ある時は人の軒を借り、ある時は野山に起臥し、時にはこれといふ寢る場所もなくて、思はず夜を更す事もあるだらうから、もう鳥は寢入つたかと、余吾の海の寂寥たる夜景を見て、しみ〴〵感じたのも無理はない。作者が路通だけに、餘韻津々たる趣がある。

―「俳句評釋」―

二二　五兵衞大明神

小泉八雲

小泉八雲　英人ラフカヂオ＝ヘルン（Lafcadio Hearn）我國に歸化しての名、東京帝國大學講師、明治三十七年歿、年五十五。

此の事件　江戸幕府の末に和歌山縣有田郡廣村に起りし津浪。

此*の事件の起つた頃五兵衞はかなりの老人であつた。その家は村でも物持であつたので、五兵衞は村の人々から尊敬されてゐた。村の人たちはいつも五兵衞を「濱口のおぢいさん」と呼んだが、村第一の金持なので「濱口の大盡」ともいつてゐた。五兵衞はいつも小作人や貧乏漁師の爲になることばかりしてゐた。喧嘩の仲裁から、困つた時の金の立替、時には貧乏人に只同樣にお米を賣つてやつたりした。

五兵衞の大きな草葺の家は、一つの灣を見おろした小さ

い高臺の上に建ててあつた。この高臺は、小さい段々の水田が濱の方へと竝んでゐて、三方は山に取卷かれてゐた。この土地は、海に向つて、その山の腹から濱邊までゐぐり取つてゐた。そして下の村には、灣に沿うて九十ばかりの草葺の家と、一つの神社とが竝んでゐた。

小泉八雲

それは秋のある夕方の事であつた。五兵衞は下の村の

祭の用意を自分の家の縁側から眺めてゐた。その年は非常に稻の出來が好かつたので、氏神で盛んな豐年祭が行はれる事になつた。老人は村の屋根の上にひるがへつてゐる大幟や、竹の竿についた祭提灯や、神社の森蔭に見える飾り行燈や、派手な揃ひを着た若い人たちの群を見ることが出來た。その時、老人と一緒にゐたのは、小さい十歲の孫だけであつた。他の者は早くから村の方へ下りて行つたが、少し加減の惡かつた五兵衞老人は、孫と淋しく留守居をしてゐたのであつた。

その日は、秋だといふのに、何となしに蒸暑かつた。そして夕方になると、そよ風が出たが、それでも何だか重くるし

い暑さが殘つてゐた。

餘波
きしむ

そんな日には、とかく地震があるものだつたが、この日も間もなく地震が來た。その地震は別に驚くほどのものではなかつた。しかし、これまで幾十回となく地震を經驗してゐる五兵衞老人には變に思はれた。長い、のろい、ゆつたりとした搖れやうであつた。多分極めて遠い土地の大地震の餘波であるらしかつた。家はきしみながら幾度か穩かに搖れて、また元の靜けさに返つた。地震が終ると、老人の鋭い考へ深い眼は、氣遣はしさうに下の村を見た。丁度何ともわからない所で、何となしに少し變だといふ感じに、思はずある一方に氣が取られるやうに、老人には沖合の方にでも、常ならぬ事があるやうに思はれ

あらはれ

たのであつた。老人は立上つて海を眺めた。海は不意に暗くなつて、何だか風と反對に波が動いてゐるやうだつた。波は沖へ沖へと走つてゐた。

忽ちの中に、下の村でもこの妙な出來事に氣が付いた。先の地震を感じた人は一人もなかつたが、この海のうごきには皆が確かに驚いた。老人の眼にも、村の大勢が浪際へと走るのが見えた。誰もがかつて知らぬほど、海水が引きはじめた。これまで知らなかつた、肋骨のやうな畦のある砂の廣場や、海草のからんでゐる大きい岩底が見てゐるまにあらはれて來た。が、村の人々は、この意外な引潮が、何を意味するかは知らないやうだつた。五兵衞自身も、こんな

咄嗟

有樣を見たのは初めてだつた。しかし、幼い時に、父が話したことが胸に浮んで來た。何百年の前にあつたといふ傳說でも、彼は知つてゐるのであつた。彼には海がどうなるかが解つた。多分この時、五兵衞老人の咄嗟に考へたことは、下の村へ孫をやるにかゝる時間の事であつたらう、山のお寺の僧に、大釣鐘を鳴らして貰ふまでに要る時間の事であつたらう。しかし、それは彼が大切とする時間よりは長くかゝるのだつた。老人は孫に向つて大聲で命じた。

「おい忠、早く、大急ぎだ。松火をつけて來い。」

松火は嵐の晩に使ふために、海岸の村々ではどの家にもあつた。子供はすぐに持つて來た。すると老人はそれを

天に沖す

命の瀬戸

摑んで、家から少し下つた田に急いだ。そこには、濱口一家の一年の勞役の酬として、熟しきつた稻の刈束が堆く積んであつた。老人はその近いものに火をかけた。日に乾いた藁は、吹きあげる海風にどつと燃えあがつた。老人は走つて、第二の稻の山に火をつけた。第三の山につけた。一山、一山、忽ちに天に沖する大きな煙の渦が、幾條も幾條も合して空に高く渦巻いた。孫の忠は青くなつて、

「お祖父さん、お祖父さん。どうして。どうしたの。」

と叫んだが、五兵衞老人は答へようともしなかつた。彼はたゞ命の瀬戸にある下の村の四百人の事ばかり考へてゐたのだつた。忠は突然泣きだして、家の中へ驅けこんだ。

夕映

その祖父が氣が狂つたのだと思つたのである。

老人は自分の家の最後の稻むらに火をつけると、その松火を投出した。この炎に山寺から鐘が鳴始めた。村の人人は、この鐘の響に、この煙の渦巻に、濱邊から村を過ぎて、丘へ丘へと蟻のむれのやうに登つて來た。

日は沈みかゝつてゐた。灣の皺のある海底や、斑らに土色のある大きい砂原の廣がりを、最後の夕映がぼんやりと照した。波はまだ沖へ沖へと走つてゐた。

實際は老人の思つたほど長くたゝない中に、火消しのための一隊が高臺に着いた。その二十人ばかりの村人はすぐ稻むらの火を消しにかゝらうとした。が、老人は手を擧

げて止めた。

「うつちやつて置け。燃やして置け。大變だ。村中皆こへ來るのだ。」村中の人々が追々と集つた。若い男たちや子供が來た。元氣な女たちや娘などが來た。それから老人の大方も來た。しまひには上からの合圖に、子供を負つた母親たちが來た。

か知らずに、次第に集つた人々は、やはり何事に眺めてゐた。燃えてゐる稻と老人の顏とを不思議さうたんだ。

「お祖父さんが氣が違つたんだ。お祖父さんが火をつけ

孫の忠はすゝり泣きながら言つた。

嚴然

「火をつけたのはおれだ。だが、村ぢや皆來たか。」

老人が嚴然と言つた。村の組合のおもだつた者や、家の主人たちは、人々の顏を見廻したり、坂を上つて來るものを數へたりして言つた。

「はい。皆ゐます。でなくても直ぐに參ります。一體どうしたのですか。」

「來た。見ろ。」

黃昏

老人は沖の方を指さして、力一杯の聲で叫んだ。

「來た。どうだ。おれは氣ちがひか。見ろ。」

黃昏のうす明りをすかして、一同は東の方を見た。そして薄暗い地平線の端に、まるで海岸のやうな、細い長い一線

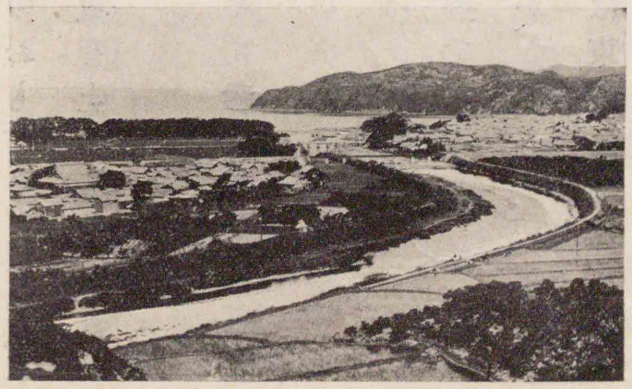
を見た。それは見てゐる中に太くなつた。線は廣くなつた。忽ちその長い暗がりは、堤のやうに、そして絶壁のやうに聳えて、鳥の飛ぶよりも早く進んで來る。押しかへしの浪だつたのである。

津浪（海嘯）

劈く

「津浪！」

と人々は叫んだ。海がおそろしく盛上つて、山々をとゞろかすほどの重さで電を劈いたやうな泡沫と共に海岸にぶつかつた時、何ともいへぬ、重い、強い、すべての叫び聲を打消すところの響がした。



廣　村

土地の五臟六腑

一時は、雲のやうに、坂の上へ突進して來る水煙のあらしの外には何も見えなかつた。人々はうろたへながら、たゞおびえた。そして再び見直した時、人々は、その家々の上を荒れくるつて走る白い恐ろしい海を見た。その海はうなりながら、土地の五臟六腑を引きちぎつて退いた。二度三度、五度、海は進んでは退き、又進んだ。しかし、その度毎に波は小さくなつて、だん〳〵元の海へと歸つて行く、大風のあとのやうに荒れながら。

高臺の上には、暫く何の聲もなかつた。一同は下の村の荒廢を無言の中に見つめてゐた。投出された岩や、裂けて骨の出た絶壁の物すごさ、家や社のさらはれた跡には、海底

からもぎ取られた海藻や砂利がはふり出されてあるむごたらしさ。村は無い。田畑の大部分も無い。濱には家が一つも無い。見えるのは、たゞ沖の方に物狂はしく浮沈みする藁屋根の二つ三つだけである。死を遁れた恐ろしさと、家と財とを奪はれた悲しさに、人々はたゞ茫然とするばかりであつた。老人が再び言つた。

「稻に火をつけたわけはあれだ。」

人々は自分の命の救はれたことに氣がついた。思はず地面に土下座して、五兵衞の前で涙にむせんだ。

老人も少し泣いた、嬉しさから。そして無理をした身體の苦しさからでも、そのまゝではゐなかつた。

はふり

茫然

「さあ、おれの家は村のだ。お寺もある。皆しつかりしろ。」

彼は先にたつて案内した。人々はたゞ叫んだり、鬨の聲を擧げたりした。それから村の困難は隨分續いた。併し村は追々に恢復した。それには老人の努力も大きかつた。

村が再び建て直された時、人々は五兵衞に對する自分等の負債を忘れなかつたが、その偉大な慈悲の魂に對しては、何とも酬いる事が出來なかつた。彼等は、五兵衞の魂は全く神の如きものであると思つた。そこで其の御魂のために、一つの社を建てて、鳥居の上には金字で「五兵衞大明神」の額をかけた。村中は少しも其の尊さを疑ふことなく、この

鬨

酬いる

神の前に祈と供物とを捧げた。

それについて老人はどう感じたか。それは私は知らない。只私の知つてゐるのは、下の村で彼が神として祀られて居る時、彼は山の上の古い草葺屋根の中で、子供や孫たちと一緒に、前の通り人間らしく質素に住んでゐたことである。もう彼が死んでから百年以上になるが、神社はやはり存在してゐて、村人の祈はこの善良な老人の御魂に向つて、今も捧げられてゐるといふことである。

―「生神」―

山路愛山

二三　大石良雄

赤穗の城下は早駕籠の爲に大騒ぎとなりぬ。江戸城中

山路愛山　名は彌吉、靜岡縣の人、史論家、大正六年歿、年五十四。

刃傷　元祿十四年三月十四日、淺野長矩、江戸城中に於て吉良義央を傷つく。

衆情恟々　危機たぐふ。

器局

*刃傷の報藩邸に達するや、早水藤左衞門・萱野三平は直ちに駕籠に乘りて、日に行く事三十里、五日にして赤穗に達し、變を國老大石良雄に報じたるなり。長矩自盡の命下るや、原惣右衞門・大石瀨左衞門は更に同じ早さを以て赤穗に達したり。君家事あり、衆情恟々、危機は始めて英傑を呼出せり。門閥に於て國中たぐふものなく、しかも溫厚にして庸愚なるが如き大石良雄は、こゝに始めて彼の器局を知られたり。畫行燈の綽名を蒙りて、久しく光を韜める彼は衆人に驚異せられぬ。赤穗城中の會議は開かれたり。事情は愈、

隱然

明白になりぬ。大野黨の一團は隱然として離れぬ。大野九郎兵衞は良雄と同じく赤穗の家老にして、班は良雄の下に在りしが、長矩に寵用せられ、且年老いて事に慣れたりしかば、勢力は却つて大なりき。彼は專ら幕府の命に恭順すべきを唱へて、成るべく溫和に城を明渡さんことを主張せり。然れども血氣に逸る藩士等は、彼を以て卑怯なり、不忠なりとし、上使を引受け、城を枕にして潔く討死すべしと唱へ出せり。良雄は言へり「まづ主君の弟大學頭長廣君をして、主君の後を嗣がしめん事を、幕府に請ふべし。」と。

越えて二日、城中の會議は復開かれたり。良雄は前說を主張せり。大野は異議を述べたり。人々は多く良雄の說

左祖　大垣侯長矩母方の從弟。

遁逃

殉死

靜肅

に左祖せり。大*垣侯戸田采女正は、大學頭を立てんと請ふことの、却つて幕府の怒を招くに過ぎざるべきを報ぜり。

逃亡は始まれり。四月十二日大野は遂に遁逃せり。人は滅ぜり。籠城は遂に行ふべからずなれり。

老人は殉死の議を唱へ、青年は復讐の論を主張せり。良雄は復讐の說は勝てり。復讐の說は勝てり。血判に與るもの百十餘人、その中江戸より來たつて難に投ずるもの僅かに十八人。

道路は淸潔にせられたり。人民は警められたり。四月十八日赤穗城の上より受城使の來たるは望まれたり。藩士の血は沸けり。良雄は極力彼等をして靜肅ならしめた

り。城中より城外へ使者は往返せり。翌日城は難なく明渡されたり。何事かあるべしと待設けたる世人は、赤穗藩士の餘りに溫和なるに驚きたり。

良雄は京都の山*科に住して、優游自適せり。田園を買ひ、居宅を營みて、永住を裝へり。彼はかくの如くして身を四通八達の地に置き、天下の視聽を集め、自ら韜晦して、上*杉氏の諜者を欺けるなり。諜者は雙方より出されたり。上杉氏は良雄を京都に偵察せしめ、良雄は吉良氏を江戸に偵察せしめたり。上杉氏は吉良氏を保護することに努め、人を遣して吉良氏の邸を守らしめ、且その采邑の人に非ざれば婢僕に用ゐることなからしめき。こゝを以て吉良氏の事情を探るは極めて難かりき。

山科　京都市東山區山科町。
優游自適　天下の視聽　韜晦
上杉氏　羽前米澤侯、吉良家の親戚。
采邑

年は暮れぬ。記憶すべき*三月十四日は再び來たりぬ。赤穗の華岳寺は市民の手向くる香火に煙りぬ。良雄は在京の同志を集めて、先君の忌祭を修めぬ。かくて花は謝し鶯は老いて、*四條河原の夕涼に都の群集雜沓する頃となりぬ。腰拔・賣國・破廉恥の誹謗は愈〻良雄の頭を壓せり。しかも彼は恬として關り知らざるものの如し。

忽ち飛報あり、江戸の吉田兼亮より來たる。いふ「七月十八日、長廣藝州に預けられたり。」と。一縷の望は絶えぬ。この時まで義氣金鐵の如く見えし同盟は、弛み始めたり。眞に復讐の志なく、長廣に因りて君家の或は再興せられんこ

三月十四日　長矩自盡の日。
四條河原　京都市を貫流する賀茂川の四條大橋附近一帯の河原。破廉恥
一縷の望

とを希望せる人々は、漸く血判を悔いはじめたり。或者は久しく音信を絶ち、或者は遁逃せり。良雄は盟書を同志に還して、亦復讐の念なきを示せり。同志の過半は憤激せり。良雄はこゝに於て彼等にその眞意を語れり。而して最も堅固なる最後の同盟は成れり。この年五月に至つて、良雄は妻と二人の幼兒とを外舅石束氏[*]に託し、獨り長子良金を携へて江戸に向ひぬ。

外舅　石束氏　名は源五兵衛　但馬國豐岡城主京極甲斐守の家老。

吉良氏の防衛はなほ密なりき。彼はその本所の邸を以て卑濕なりとし、これを修補するまで、麻布なる上杉氏の別邸に住まへり。これ彼が刺客を避くる計なりき。同盟は復讐に急げり。殊に老いたる人々は餘命のおぼつかなき

を以て、早く事を濟まさんと欲せり。或者は寧ろ白晝公然吉良氏を襲うて、一死を賭せんと欲せり。しかも良雄は聽かざりき。

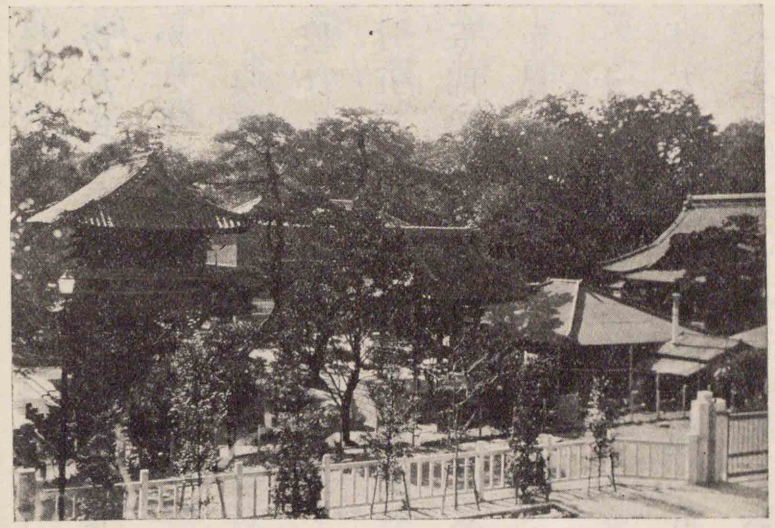
平間村　現今の神奈川縣橘樹郡御幸村大字下平間。

良雄父子は直ちに江戸に入ることを敢へてせざりき。彼はまづ池上の平間村[*]にありて、吉良氏の動靜を覗ひ、十一月五日に至つて、漸く江戸に入れり。父子は變名して、垣見五郎兵衛・同佐内と名のりぬ。年少なる良金は始めて江戸を見たりしなり。

十二月に至つて吉良氏の邸は成れり。而して夜々怪しげなる青年はこれを窺へり。彼等は何處より來たり、何處へ去るを知らず。五更に至つて他の一隊と交代せり。さ

五更

泉岳寺　東京市芝區高輪車町にあり。



泉岳寺

すがの吉良氏もこれに氣付かざりき。しかも間諜・探偵すべて效を奏せず、祕密は却つて吉良家に出入する茶道より、同盟の一人横川宗利に漏れたり。義央の邸に歸るべき日は明らかになりぬ。復讐の日は卽ち定まりぬ。

十二月十四日の朝、良雄は*泉岳寺に至りて長矩の墓に謁し、三百金を寺僧に寄せて

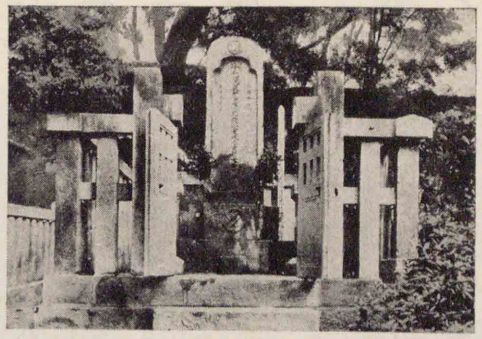
去れり。

この夕、雪霏々たり。同盟者は漸く集まれり。火事裝束せる四十七箇の人物は、三隊に分れ吉良邸の三面を圍めり。笛聲は雪夜の寂寥を破れり。鬪諍叫喚の聲は聞えたり。すでにして再び笛は鳴れり。火事裝束せる四十七箇の人物は吉良邸を出去れり。

雪霽れて、夜も亦明けたり。例の如く十五日を祝すべき登城の諸侯と武士とは、城をさして鹵簿を急げり。忽ち聞く、路人の喧噪なるを。始めて知りぬ、赤穗の浪士が吉良氏の邸を襲うて義央の首を獲たるを。

風說は區々たり。飛語は紛々たり。いはく、吉良氏を襲

ひしものは獨り四十七人に止まらず、この外なほ黒裝束を爲せる百二三十人ありて、吉良氏の門外を圍みたり。いはく、上杉氏の兵は四十七人を追撃せり。いはく、淺野氏と上杉氏と相闘はんとすと。

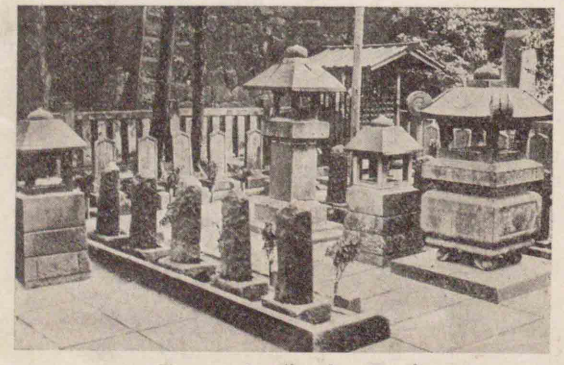


淺野長矩の墓

良雄は吉田兼亮・富森正因を大目付仙石伯耆守の第に遣りて事實を報ぜしめ、同志相率ゐて泉岳寺に至り、義央の首を長矩の墓に供し、祭文を讀みてその志を告げ、靜かに官裁を待てり。寺は三斗の酒を置きて壯士を勞へり。人あり、いふ「上杉氏の衆至る。」と。良雄は

同志を警めて防禦の備を爲せり。而して上杉氏の衆は終に來たらざりき。

この日良雄等は仙石氏の第に招かれ、細川（熊本）、久松（松山）、毛利（長府）、水野（岡崎）の四家に預けられたり。良雄は他の十六人と共に細川氏に、良金は他の九人と共に久松氏に。元祿十六年二月四日、四十六人は死を賜はれり。細川綱利は良雄等に訣別の杯を賜へり。良雄は他の十六人と共に、幕府の檢使の前に自裁せり。



泉岳寺義士の墓

良雄は外溫藉にして、內に枉ぐべからざる意志を有したりき。彼は何事もうち靜めて、騷がしきことを嫌ひたりき。彼はいかなる場合にも、長者たる品位を失墜せざりき。然れども彼は徒らに平和を愛するものに非ず。なすべき事は必ずなし遂げ得べき主一と堅忍とを有したりき。彼はストア學者の表面と戰國武士の裏面とを有したりき。彼は愛すべくして狎るべからず、畏るべくして嫌ふべからざる人なりき。彼が同盟の首領として成功せし所以のもの、職としてこの品性ありしに由れり。

—「愛山文集」—

溫藉　主一

ストア學者 Stoics. ストア哲學は、西紀前第四世紀末ギリシヤの哲學者ゼーノー（Zeno）の創唱せし、窮理よりも實踐を重んじ、克己主義をとる哲學の一學派。

二四　針葉樹

佐佐木信綱

峠茶屋人かげあらずとまりたる柱時計に薄き日さして

しめやかに光おとしぬ月よみは眠れる古き都の上に

天地に物音もあらず月一つ空にかゝれり富士

佐佐木信綱筆

佐佐木信綱　三重縣の人、國文學者、文學博士、明治五年生。

しきしまのやまとの國をつくり成す一人とわれをしまざらめや　信綱

月よみ

の嶺の上
きら〳〵と海は光れり磯の家松葉牡丹に晝の
雨降る

尾上柴舟

あたゝかき夜をしらぐ〳〵降る雪に湯浴みして
ゐる身のうれしかりけり

尾上柴舟

春日山やまふかくゆく風の音きゝ入れば世の
はるかなるかな

尾上柴舟

尾上柴舟
名は八郎、國文學者、文學博士、東京女子高等師範學校教授、明治九年生。

さきおもるやへはなさくらゆさ〳〵とゆるゝがみえてよるのかぜふく　八郎

行幸待つ苑の廣道針葉樹細かに春の影おとしたり

大帝いまわが前を過ぎたまふかく思ふだに畏きものを

―「現代一萬歌集」―

二五　明治天皇の御遺物を拜す

笠井信一

*先月十七日、宮中より地方長官一同に午餐を賜ふ旨仰せ出されましたので、定時に參内致しましたところが、十一時過、權殿參拜を許されました。權殿と申すは、崩御の後、一年間皇靈を祭らせられる宮中の御室でございます。卽ち私どもはこの度先帝の皇靈を拜する特別な御恩典にあづか

笠井信一
靜岡縣の人、當時の岩手縣知事、貴族院議員、昭和四年歿、年六十五。

先月　大正二年正月。

權殿

萬機

つたのでございます。そこで私どもは長い廣い御廊下に整列致しまして、宮殿奥深く權殿に詣つて、一人づつ最敬禮を致しました。蓋しその瞬間は何人と雖も、一種の靈感に打たれないものはなかつたでございませう。その權殿と申すは、平素皇后陛下の謁見所たる桐の間を以て、これに充てさせられたのでございました。

明治天皇

それから更に奥殿に進みまして、御學問所を拜觀致しました。御學問所は表御座所とも申し上げ、萬機の政を御親

膺懲

宏謨雄圖

裁遊ばされる所でございます。先帝には永くこゝに在らせられて、德教を御布きになり、大憲を御定めになり、或は國交を御修め遊ばされ、時に或は膺懲の師を起させられる等、宏謨雄圖一にこの中で御定め遊ばされたのでございます。

絨毯

然らばどんなに御立派な御部屋かと申すに、實に意外なことで、平常私どもが參内の節休息を許される御部屋の方が、却つて遙かに御立派である。しかも餘り廣くない二間續きの御部屋で、瀟洒たる檜木の白木造ではあるが、別段これと申す御裝飾も遊ばされてない。御机も、御椅子も實に御質素なもので、絨毯の如きは、當初敷かれたまゝのもの故、後には色も大分褪めてまゐりましたので、侍臣から御取替を

屢願ひ出ましたが、御許しがなくて、終に今日に至つたのださうでございます。

御部屋は三方壁を以て廻らし、南の一方に硝子戸があり、御机は御座所の中央に、南向に御据ゑになつてあります。この御構造を拝観すると同時に、夏分はさぞ御暑いことであらせられたらうと感じましたが、先帝には御暑さの御厭ひもなく、連日こゝに出御あらせられたのでございます。

これにつけても、

年々に思ひやれども山水をくみて遊ばん夏なかりけり

の御製を想ひ起して、誠に恐懼に堪へませんでした。それ

のみならず、この御部屋には*ストーブの御設がございますけれども、三十七年の冬以来、御用ゐがない。竊かに承るに、その年の冬の或朝、例の如くストーブに火が焚いてございましたが、先帝が出御遊ばすや否や、「火を消せ。」と仰せられる。侍従は何故かわかりませんが、たゞ仰せのまゝに火を消しました。さてその後と申すものは、いかなる酷寒と雖も、一切ストーブの御使用を御許し遊ばされなかつたとの事でございます。これは勿論大御心のほどを窺ひ奉るわけには参りませんが、侍従方の推測し奉るところでは、當時皇軍が満洲の野に大敵と戦ひ、飢寒に苦しんでゐるのに御同情を垂れさせられ、兵士と艱難を共にせんとの大御心にいで

ストーブ Stove.

させられた次第であらうと申すことでございます。それ以來は、たゞ一箇の小さい丸火鉢のみを御使用遊ばされたとの御事。今その御火鉢を拜觀するにつけても、思ひ出されるのは、斯民の上を思ひやらせられた御製、

桐火桶かきなでながら思ふかなすきまおほかる賤が伏屋を

でございます。

この御部屋の拜觀が終つて、更に別室の拜觀を許されました。この御部屋には、先帝の御學問所で御使用になつた御遺物全部、そのまゝに据ゑおかれてございます　これは*今上天皇陛下の大御心に出でさせられた趣に拜承致しま

斯民

今上天皇陛下　大正天皇。

した　構造も、方向も、廣さも、御學問所と全く同一であつて、すべての御遺物も、昨年七月十三日、卽ち先帝最後の出御當時のまゝに、御備へつけになつてございました。床の間には、その當時の御軸物が掛けてあり、その前方には、御劍數振横たはり、御机は中央に南面してございます。先帝御在世の折は、我等如き者が御机に接近するなどは思ひも寄らぬことでございますが、今回は特に御許しを蒙つて、仔細に拜觀する光榮を得ました。

まづ御机は羅紗を鏡張にした*テーブルで、中ほどに燒痕がございます。これは先帝が御煙草を召しあがつていらせられた節、臣下より政務を言上致しましたところ、先帝は

テーブル　Table.

御吸ひかけの御煙草をテーブルの上の或物に横たへて、御熱心に御聽取あらせられた折、煙草がおちてこの燒痕がついたのだと申すことでございます。さてこの燒痕のあるテーブルの羅紗を御取りかへ申しあげようと、侍臣より幾度か願ひいでましたけれども、斷じて御許しが無かつたとの御事。蓋し何物でもそれにて事足る以上は、修理さへ御控へ遊ばされる御儉德の至りと拜察し奉ります。

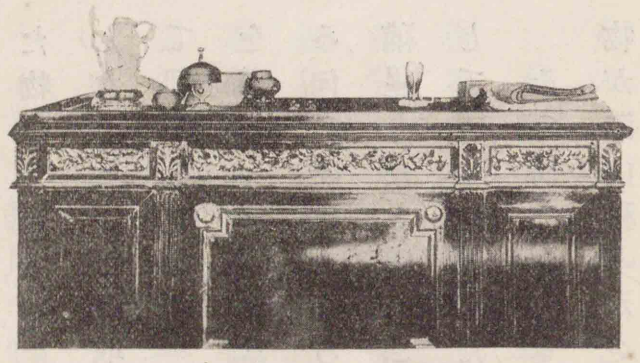
御硯箱は、明治二十年に鹿兒島縣から御取寄せになつた竹製の品でございます。その中の筆は普通の御品で、我等臣下の日常用ゐる物と變らないのみならず、毛尖は禿び、軸の文字は見えない程に御使ひふるしになり、墨も亦同樣で

横たへて

禿び

憮愧

インキ Ink.



明治天皇御常用御机

一寸くらゐに磨りへらされた品もございました。鋏も同じく普通市場にある品で、その傍に、學校生徒等の用ゐる普通のインキがございました。最初は、侍從の方が何かの調べに用ゐたまゝ、そこに置忘れたのであらうと存じましたが、やはり先帝の日常御用ゐになつたものだと承つて、今更ながら御儉德の高きに感激し、自ら顧みて慙愧に堪へなかつた次第でございます。

御椅子の下に獅子の毛皮が敷いてございます。これは

赤坂假皇居において遊ばされた頃から、長く御使用になつた物で、毛も次第に磨りきれ、皮も終に破れるやうになりました。そこで御取換を願ひ出でましたが、「なに、よろしい。」と御許しがない。せめて御修理をと願ひ出て、漸く御許しを得た。併し適當な皮のないことを言上致しましたところ、何の皮でもよろしいとの思召であつたので、赤犬の皮で補足したと申すことで、侍從が「この邊が犬の皮です。」と說明して居られました。

その傍にホワイトシャツ*を入れる白いボール*箱やうの物が澤山積みかさねてございましたから、何に遊ばす物かと侍從に尋ねましたところ、やはりシャツの空箱であるが、

ホワイトシャツ　White shirt.
ボール　Board.

書類を入れるに便利であるとて、御手許に留め置かせられたのであるとのことでございました。

大臣方より上奏御裁可を願ふ書類は、紙袋に入れ、表に主務者の名を署して上るのだそうですが、御親裁の後は、別の紙袋に入れて御下げになる。そして御不用になつた前の紙袋は、一枚たりとも御棄て遊ばされず、隨時御詠出の御製を御認めになる御詠草に御用ゐになりました。それを御側の方が別紙に拜寫して、御歌所に御廻し申したのでございます。實に天下の物は用ゐるにその途を以てすれば、一つとして無用の物はない。先帝はかく萬機の政を聞しめされながら、一枚の反故をも棄てさせられず、廢物を御利用

遊ばされたのでございました。

又傳へ承るに、先帝が皇室費豫算を御親裁遊ばされる節は、詳細に御覽になり、祖宗の祭祀及び慈善に關する費目の外は、務めて御節約相成り、聊かにても冗費をば御省き遊ばしたと申すことでございます。

冗費

一天萬乘の大君におはしましながら、禿びた御筆を御用ゐになり、破れた敷皮を御下げにならぬといふのは、いかなる思召であらせられませうか。皆これ、節すべきを節して、有用の事にのみ御用ゐ遊ばさうといふ大御心に外ならぬ事と存じます。

一天萬乘

さて御次の間には、造花や、彫刻や、種々な御品が備へてご

ざいました。これを拜見致しまするに、學校や展覽會等に行幸の節、御奬勵のため御持歸り、又は御買上にならせられたもので、御裝飾の御目的とは考へられません。それ故、造花の如きも格別なものでなく、何年前の物か色も褪めはてて、殆ど裝飾の用を爲さぬ物まで、そのまゝになつてございます。その他、美術工藝品の御買上も、皆御奬勵の爲で、俗人の道樂とは全く趣を異にしてあらせられます。御製に

千よろづの民と偕にも樂しむにます樂しみは

あらじとぞ思ふ

とございますが、實にこのやうな御樂しみを求めさせられる爲に、先帝は長い年月の間、大いなる御苦心を遊ばされた

のでございます。

今や我が國運は、先帝の長き御心づくしの御蔭を以て、隆として興り、我等は世界の一等國民となりました。顧みれば我等は長い間、聖天子御一人に非常な御苦勞をお掛け申し上げましたのでございます。こゝに御遺物拜觀の光榮を拜謝するに當り、更に

ほど〳〵にこゝろをつくす國民のちからぞや

がてわが力なる

の御製をも同時に服膺して、公人としても私人としても、力のあらん限りを盡し、以て「我が日の本のかため」の爲、應分の貢獻をなし、御高恩の萬分の一に對へ奉らんことを誓ふ次

第でございます。

二六　明治神宮と松

大町桂月

―「岩手學事彙報」―

明治神宮は林の中にあり。その林にはありとあらゆる樹木を網羅せるが、神門の内、拜殿を正面にして廻廊に圍まれたる神庭には、唯十數株の喬松あるのみなり。吾人は日本の國柄より見て、樹木の選擇その宜しきを得たるを歡喜せずんばあらず。

日本は松の國なり。先づ在來の所謂三景を見よ。松島は其の名の如く、八百八島みな松の島なり。天の橋立は四十二町の長洲の松を帶ぶる處なり。嚴島にも松多し。殊

大町桂月　名は芳衛、高知縣の人、文學者、大正十四年歿、年五十七。
網羅　喬松

に濱の黒松直ちに峯の赤松に接するの奇觀を呈す。三景は松を主とせるなり。須磨・明石は言ふも更なり。日本にては、海岸到る處として他の樹木は堪へ難きも、松ひとり堪へて、激しき潮風に舞ひ、山上到る處として他の樹木は堪へ難きも、松ひとり堪へて、天風に仙樂を奏す。

松無くんば日本の庭を成さず。松ありて神の廣前ます尊し。松や皇國を象徴す。明治神宮に詣づるもの、廣前の松に思を致す所なかるべけんや。

―「柱月全集」―

仙樂

象徴

二七　詩二篇

偶成

朱晦庵

少年老い易く學成り難し。
一寸の光陰輕んず可からず。
未だ覺めず池塘春草の夢。
階前の梧葉已に秋聲。

勸學

同

謂ふこと勿れ、今日學ばずとも來日有りと。
謂ふこと勿れ、今年學ばずとも來年有りと。
日月逝きぬ。
歲我と延びず。

偶成

朱晦庵

名は熹、支那南宋の大儒、世に朱子といふ。（西暦一一三〇―一二〇〇）

池塘

愆

慶・元　慶長・元和、德川氏の初期。

屑しとせず

下海　經商

嗚呼老いたり。是れ誰の愆(あやまち)ぞや。

二八　山田長政

其一

山田長政は駿府の市人なり。少くして大志有り。好んで書を讀み、兵事を談ず。慶・元*の際、天下始めて定まり、士の仕を欲する者、皆侯伯を求む。長政屑(いさぎよ)しとせずして曰く、「此の間功名を立つる處無し。唯〻海外に游ばば、或は以て吾が志を展ぶべきのみ。」と。時に下海禁無し。府に經商二人有

山田長政肖像

回易

蠻舶

六昆　リゴール、マレー半島に在り。

り、瀧と曰ひ、太田と曰ふ。將に海に航して臺灣に回易せんとし、舟を大阪に艤す。長政之に附乘せんことを請ふ。二人許さず。長政乃ち先づ大阪に到り、二人の舟を求め、入つて匿る。既にして二人至り、帆を揚げて發す。長政乃ち艙間より出でて前請を重ぬ。二人大いに驚けども之を如何ともする能はずして之を許す。既に臺灣に到り、又蠻舶に附して、西の方暹羅に游ぶ。會〻邦内騷亂し、四隣交〻侵す。而して六*昆最も强し。暹羅の國主、師を出して之を禦ぐ。長政其の行軍の紀律無きを見て、私に其の必ず敗れんことを言ふ。既にして果して然り。

□山田長政は駿府の市人なり。

山田長政ハ駿府ノ市人也。

大日本は神國なり。
□書を讀む。
　身を修む。
□功名を立つ。
　公益を廣む。
□海に航す。
　公に奉ず。
□臺灣に到る。
　國法に遵ふ。

大日本、神國也。
讀レ書。
修レ身。
立二功名一。
廣二公益一。
航レ海。
奉レ公。
到二臺灣一。
遵二國法一。

其二

人或は其の語を傳へて國主に聞す。國主之を奇とし、長

詢ふ　鑿鑿
流寓
亡慮
聲言
海澨

政を召見して方略を詢ふ。長政指畫して策を陳ぶ。鑿鑿用ゐる可し。國主大いに喜び、長政を擢んでて上將軍と爲し、往いて六昆を禦がしむ。時に本邦人の暹羅に流寓せる者衆し。長政數百人を糾合し、雜ふるに土兵を以てし、亡慮萬餘人。皆日本の裝を爲し、日本の援兵大いに至ると聲言す。六昆の軍沮む。因つて兵を縱つて奮擊し、大いに之を破る。六昆王憤ること甚しく、國を傾けて來寇す。兵數十萬なり。長政曰く、「敵衆强盛なり、與に鋒を爭ひ難し。唯謀を以て之を撓めば、之を破らんこと易易たるのみ。」と。乃ち軍を分つて三と爲し、一は山陰に伏し、一は海澨に戰す。長政親ら其の一を率ゐて、海陸の間に出で、進んで挑戰す。

伴る　兵既に交り、伴つて敗走す。六昆の兵之を追うて將に及ばんとす。吶喊　號砲俄に發し、海陸の二軍、吶喊して齊しく進み、火鎗亂發す。長政機を視て之に反し、敵軍を中にし、前後より之を擊ち、大いに六昆の兵を破り、數萬人を殺す。遂に北ぐ　北ぐるを追ひ、長驅して其の都に入り、六昆王を擒にして以て歸る。款を送る　威遠近に震ひ、四隣爭うて款を遣羅に送る。是に於て國主大いに長政を賞し、妻はすに其の女を以てし、六昆の地に封じ、號して唵普良と曰ふ。唵普良とは蓋し諸侯王の謂なり。

□長政を召見す。

智能を啓發す。

召見長政。

啓發智能。

□遣羅に流寓す。

海外に游學す。

□兵既に交る

天下大いに治まる。

流寓遣羅。

游學海外。

兵既交。

天下大治。

攝行

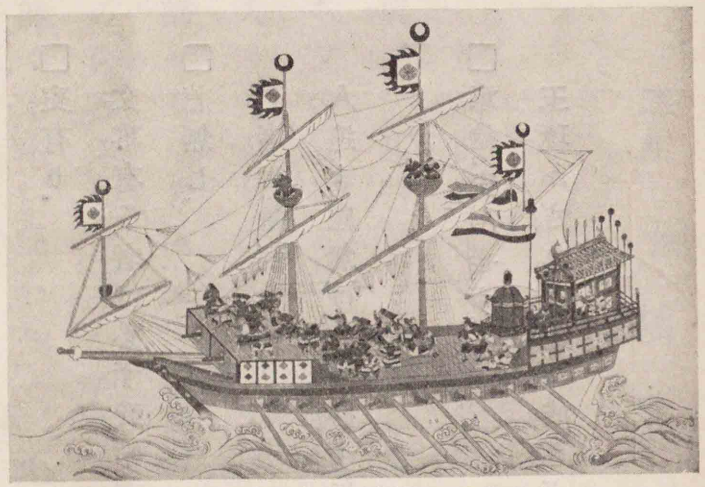
其三

久しうして國主年既に高く、頗る勤に倦み、長政をして國事を攝行せしむ。是に於て、唵普良の名、印度諸國に噪がし。而して本邦は地隔遠にして未だ聞知せざるなり。數歲にして瀧・太田復た海外に回易し、行いて遣羅に到る。既に其の界に入れば、國王の使者至り、相迎へて館に入る。少らくして吏有り、來り戒め、王二人を召見すといふ。二人、初め其

冠服　交椅　燊　儀衛　俯伏　供御　便服　恙無し　愕眙　發跡

の故を知らず、心頗る疑懼す。且らく吏に從ひ入つて見ゆ。王冠服して交椅の上に在り。金珠目に燊として、儀衛甚だ盛なり。二人俯伏膝行し、敢て仰視せず。退いて館に就くに及び、飲食供御、貴客を待つ者の如し。意益〻安んぜず。既に夜となる。復た更に傳呼して至るもの有り、曰く、「王來る。」と。二人驚いて出で迎ふれば、王便服して入つて坐し、笑つて二人の肩を拍つて曰く、「故人恙無きや。」と。二人愕眙して仰ぎ視れば、乃ち長政なり。長政自ら備さに其の發跡の由を說く。二人叩頭して謝して曰く、「鄙人愚矇、嘗て塵埃の中に相從ひ、無禮にして罪を獲たること多し。意はざりき、大王能く自ら靑雲の上に致さんとは。」と。長政曰く、「予の今日

幕絵　扁　桑梓　淺間廟　靜岡市、國幣小社淺間神社。



山田長政の淺間神社獻納戰艦の圖

戰艦の狀を幕繪せしめて扁と爲し、商舶に附して淺*間廟に有るは、實に二子の賜に由る。抑〻人我に德有れば報いざる可けんや。」と。既に罷め、厚く賜うて之を遣る。本邦の商旅之を聞き、多く暹羅に游ぶ。長政皆善く之を遇せり。長政富貴と雖も、而も常に桑梓を懷うて置かず。戰に臨む毎に、遙かに駿府の淺間の神に禱り、軍輒ち勝つ。是に至り、工に命じ當時の

報賽

獻じ、以て報賽せり。

□吏有り。　有レ吏。

文事有る者は必ず武備有り。　有ニ文事一者必有ニ武備一。

□恙無し。　無レ恙。

仁者は敵無し。　仁者無レ敵。

人遠き慮無ければ、必ず近き憂有り。　人無ニ遠慮一、必有ニ近憂一。

□意益〻安んぜず。　意益〻不レ安。

玉琢かざれば、器を成さず。人學ばざれば道を知らず。　玉不レ琢、不レ成レ器。人不レ學不レ知レ道。

—「齋藤正謙の文に據る」—

乃父

銜む

惡んぞ…ん

二九　小楠公

其一

正成既に死す。尊氏其の首を河内に送る。一家聚りて哭す。正行起つて室に入る。其の母尾して之を窺へば、則ち父の授けし所の刀を執り、將に自殺せんとす。母直ちに入り、刀を奪ひて泣いて曰く、「汝何ぞ惑ふや。乃父の汝を遣歸せしは、豈汝をして自殺せしむるならんや。汝遺命を銜み、歸り來つて我に告ぐ。而して汝先づ之を忘る。惡んぞ能く王事に任へん。」と。正行大いに悟り、是より國賊を討ち父の讎を復するを以て志と爲す。楠氏の族黨多く湊川に

義故

死す、而れども河内・紀伊の間、猶義故の存する者有り、皆正行を戴かんことを思ふ。

□正成既に死す。

□尊氏其の首を河内に送る。　尊氏送ニ其ノ首ヲ於河内ニ一。

書を樓上に讀み、詩を湖畔に吟ず。　讀ニ書ヲ於樓上ニ一、吟ニ詩ヲ於湖畔ニ一。

□國賊を討ち父の讎を復するを以て志と爲す。　以テ討ニ國賊ヲ一復ス父讎ヲ一爲レ志ト。

臣と爲りては忠に死し、子と爲りては孝に死す。　爲レ臣死レ忠ニ、爲レ子死レ孝ニ。

其二

正平*三年正月、正行弟正時と諸宗族を率ゐて行宮に詣り、中納言藤原隆資に因り、上言して曰く、「先臣正成嘗て微力を以て強賊を挫き、以て先帝の宸憂を安んじたてまつる。天下再び亂れ逆賊四襲するに及び、遂に命を湊川に致せり。臣時に年十一、命じて河内に歸らしめ、囑するに餘燼を收合し、國讎を報復するを以てせり。臣年已に壯なり。而して稟性羸弱、常に念ふ、今に及んで力戰せず、待つ有るの身を以て虞る無きの疾に罹らば、上は不忠の臣と爲り、下は不孝の子と爲らんと。今、賊の渠帥大擧して來り犯す。是れ眞に臣が命を致すの秋なり。臣彼が首を獲るに非ざれば、則ち臣が首を彼に授けん。臣の生死は今日に決す。切に希は

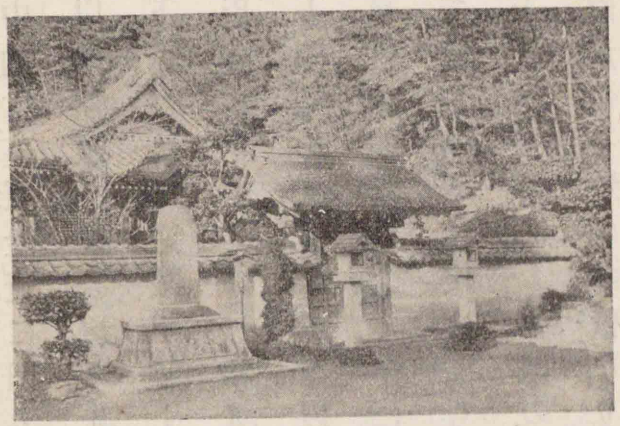
正平　後村上天皇の年號。
行宮　詣る
餘燼
稟性　羸弱　待つ有るの身　虞る無きの疾　罹る　渠帥　秋

辭訣

曰く　曩日　兩捷　曩に正行、賊軍を藤井寺及び安部野に破る。　殺ぐ

くば一たび天顔を拜して行くを得ん。」と。

隆資入りて奏す。帝簾を揭げ、將士を臨み視たまひ、正行を進ましめ之を勞して曰く、「曩日の兩*捷、大いに賊勢を殺ぎ、甚だ朕が心を慰めたり。朕深く汝が世忠を嘉す。今、賊銳を悉して來る。眞に安危の決なり。然りと雖も、兵の進退は宜しきに從ふを貴ぶ。朕汝を以て股肱と爲す。汝其れ自愛せよ。」と。正行俯伏し、淚を垂れて出で、後醍醐帝の廟に辭



後醍醐天皇御陵

四條畷　河內國中河內郡に在り。

訣し、族黨百四十三人の姓名を廟壁に題し、然る後途に上る。遂に四*條畷に戰死せり。時に年二十二。

—「日本外史に據る」—

□遂に命を湊川に致せり。　遂ニ致シ二命於湊川一。

□臣彼が首を獲るに非ざれば、則ち臣が首を彼に授けん。　非レバ二臣獲一ルニ彼ガ首ヲ一、則チ授ケン二臣ガ首ヲ於彼一。

□待つ有るの身を以て虞る無きの疾に罹る。　以テ二有ルヲ待之身ヲ一罹ル二無キ虞ノ之疾一。

□上は不忠の臣と爲り、下は不孝の子と爲らん。　上爲リ二不忠之臣一、下爲ラン二不孝之子一。

□朕汝を以て股肱と爲す。　朕以テ二汝ヲ爲ス一股肱一。

三〇　出でんと欲して壁に題す

僧*月性

男兒志を立てて鄉關を出づ。
學若し成らずんば死すとも還らず。
骨を埋むる豈惟ゝ墳墓の地のみならんや。
人間到る處青山有り。

□欲レ出レ題レ壁
男兒立レ志出二鄉關一。
埋レ骨豈惟ゝ墳墓地。
學若不レ成レ死不レ還。
人間到レ處有二青山一。

僧月性　周防の人、奇僧、意を海防に用ふ。安政五年歿、年四十二。
鄉關　豈惟ゝ…のみならんや

三一　重盛の忠孝

一　平氏の專橫を嫉む

仁*安元年、平清盛正二位に叙し、内大臣に任ぜらる。二年、遂に從一位に至り、太政大臣に陞る。既にして清盛髪を削つて淨海と稱し、別第を西八條に興して居る。治*承元年、重盛左近衞の大將に任じ、尋いで内大臣に拜せられ、小松の第に居る。弟宗盛右近衞の大將と爲る。是の時に當つて、平族朝官と爲る者六十餘人、其の采邑三十餘州に跨る。平時忠衆に謂つて曰く、「方今天下の人、平族に非ざる者は人に非ざるなり。」と。朝臣擧つて平氏の專橫を嫉み、後白河法皇も

仁安元年　六條天皇の朝。
治承元年　高倉天皇の朝。
采邑

執事
居常
鹿谷　京都市の東北にあり。
福原　神戸市の西にあり。
檢非違使
且に…んとす
鞫す

亦積んで平かなる能はず。藤原成親、權大納言を以て法皇の執事たり。重盛其の妹を娶つて、子維盛を生み、又其の女を娶つて子の婦と爲す。然れども成親殊に大將たらんことを希うて得ず。居常憤憤として、遂に平氏を滅さんことを圖る。陰かに院勅を受け、僧西光・源行綱等と鹿谷に會して謀議す。行綱自ら度るに、事竟に成らざらん、自首するに若かずと。乃ち夜馳せて西八條に赴く。清盛福原に在り、又之に赴き、面して事を告ぐ。清盛大いに駭き、直ちに京師に歸りて、悉く子弟宗族を召し、檢非違使阿部資成を遣はして奏せしめて曰く、「兇徒有り、臣が宗を滅さんと圖る。臣且に執へて之を鞫せんとす。然れども事必ず源有らん。是を

敢て奏す
掠治
比
繹騷

以て敢て奏す。」と。法皇色を失ひ、答ふる所を知りたまはず。

□清盛髮を削つて淨海と稱す。　清盛削レ髮稱二淨海一。
□采邑三十餘州に跨る。　采邑跨二三十餘州一。
□別第を西八條に興す。　興二別第一于西八條一。
□事必ず源有らん。　事必有レ源。
□事竟に成らざらん、自首するに若かず。　事竟不レ成、不レ若二自首一。

二　是れ私事のみ

清盛命じて西光を縛して至らしめ、痛く之を掠治して實を得たり。乃ち人をして成親を召さしむ。成親未だ事の覺れたるを知らず、乃ち往く。西八條に及ぶ比、甲士の繹騷

掉す　昏

姻戚　君寵　興行　左府　悪左府　左大臣藤原頼長をいふ。　發く　善悪の應　殃慶

するを見て心驚く。門に入るに及んで、平氏の士難波經遠・妹尾兼康、耦進して之を掉し、小室に囚へ、將に昏を待つて之を殺さんとす。久しうして重盛至る。衆迎へて之に謂つて曰く、「大事有り。公來る何ぞ晩き。」と。重盛曰く、「是れ私事のみ、何ぞ大事と言はんや。」と。入りて淸盛に謂つて曰く、「聞く、大納言を殺さんと欲すと。願はくは之を再思せよ。兒豈姻戚を以て爾云はんや。彼は名族たり、君寵を受く。未だ私怨を以て殺す可からざるなり。往時少納言信西、死刑を興行し、悪左府の墳を發く。未だ二歳ならざるに、信西の墓も亦藤原信頼の發く所と爲る。善悪の應、殃慶立ちどころに至る。願はくは之を再思せよ。」と。出でて經遠・兼康を見

て、其の亡狀を責め、因つて之を戒めて曰く、「愼んで我が公をして怒に乘じ悔に抵らしむること勿れ。」と。乃ち歸る。

□善悪の應、殃慶立ちどころに至る。　善悪之應、殃慶立至。

□成親未だ事の覺れたるを知らず。　成親未知事覺。

其の一を知りて、未だ其の二を知らず。　知其一、未知其二。

□將に昏を待つて之を殺さんとす。　將待昏殺之。

將に往いて歐・美に游び、以て見聞を廣めんとす。　將往游歐・美、以廣見聞。

□人をして成親を召さしむ。　使人召成親。

□我が公をして怒に乘じ悔に抵らしむること勿れ。　勿使我公乘怒抵悔。

三　重盛の忠孝

亟かに　在昔　田村麿　坂上田村麿なり。桓武天皇の朝征夷大將軍となり、蝦夷を征して功あり。　豈獨り…のみならんや　保元の變　後白河天皇の保元元年、崇徳上皇兵を擧げ給ふ。　新院　崇徳上皇なり。　重仁親王　崇徳上皇の皇子。　覆育　故院　鳥羽法皇なり。　平治の變　二條天皇の平治元年、藤原信頼、源義朝と結んで亂をなす。　克平　猖獗

亟かに將士を戒めよ

是に於て、清盛乃ち甲を被り長刀を執つて出で、平貞能を召んで曰く、「亟かに將士を戒めよ。今擧朝の人、我を嫉み我を圖る、蓋し我が官爵分に踰ゆと謂ふのみ。在昔、田村麿は豈獨り…のみならんや保元の變後白河天皇の保元元年、崇徳上皇兵を擧げ給ふ。新院崇徳上皇なり。重仁親王崇徳上皇の皇子。覆育故院鳥羽法皇なり。平治の變二條天皇の平治元年、藤原信頼、源義朝と結んで亂をなす。克平猖獗

徽者なり。東夷を平げし功を以て、超えて大將に拜せらる。他此に類する者多し。豈獨り淨海のみならんや。淨海の勤勞は一日に非ざるなり。保元の變に、我が宗族大半新院に赴けり。且、重仁親王は我が父の覆育しまつりし所なり。而れども我故院の遺詔を思ひ、獨り官軍に屬して、終に亂逆を克平せり。平治の變に、信頼・義朝の猖獗なる、吾にして自愛せば、事未だ知る可からず。命を重んじ躬を輕んじ、凶黨を夷滅して、以て經宗・惟方等を收むるに至れり。數大難を冒せるは、官家の爲にするに非ざる者無し。此を以て之を言へば、官家の恩宥、子孫を窮むと雖も可なり。今乃ち輕し く讒言を信じたまひ、族滅せられんと欲す。若し告ぐる者無くば、豈危殆ならずや。異日、細人再び言を進むる有らば、則ち宣を下して我を討ち、我を目して賊と爲したまはん。悔ゆ可からざるなり。吾先づ發して之を鳥羽の宮に移し まつらんと欲す。しからざれば、此に幸したまはんことを請はんのみ。北面の奴輩、或は且に我を扞がんとす。亟かに將士を戒めよ。」と。

□獨り官軍に屬して終に亂逆を克平せり。

夷滅　恩宥　族滅　危殆　異日　細人　北面

駕

□重仁親王は、我が父の覆育しまつりし所なり。

孝は百行の本なり。

己の欲せざる所、人に施すこと勿れ。

□事未だ知る可からず。

一寸の光陰輕んず可からず。

言ふ可くして行ふ可からず。

四　襟開き甲見ゆ

主馬盛國といふ者有り。馳せて重盛に告ぐ。重盛大いに驚き、急に駕を命じて之に赴く。第門を入れば、族人皆甲

獨屬官軍、終克平亂逆。

重仁親王者、我父所覆育也。

孝者百行之本也。

己所不欲、勿施於人。

事未可知。

一寸光陰不可輕。

可言而不可行。

旗幟
烏帽直衣
叩ふ

覬覦

を着け馬に鞍し、旗幟列を成し將に起たんとす。重盛烏帽直衣にして入る。宗盛其の袖を叩へて曰く、「公何を以てか甲を被らざる。」と。重盛睨んで曰く、「汝等何を以てか甲を被る。敵人何くに在るか。吾は大臣大將たり。寇賊闕を犯す有るに非ざるよりは、則ち宜しく甲を被るべからざるなり。」と。清盛之を望見して遽に起ち、黒衣を表して出で、襟を正しうすれども、襟開き甲見ゆ。重盛に謂つて曰く、「吾西光の狀を察するに、成親等の如きは、乃ち其の枝葉のみ。此頃群小覬覦して已ま

平重盛肖像

御す　何の至らざる所かあらん

ず。而して御するに輕躁の君を以てす。何の至らざる所かあらん。我且らく一邊に幸したまはんことを請うて、以て事の定まるを待たんと欲す。」と。

□數ゝ襟を正しうすれども襟開き甲見ゆ。

數ゝ正レ襟、襟開レ甲見ユ。

□群小覬覦して已まず。

群小覬覦シテ不レ已。

□御するに輕躁の君を以てす。

御スルニ輕躁之君ヲ以テス。

答ふるに有る無きを以てす。

答フルニ無レ有ルヲ以テス。

囑するに餘燼を收合し、國讎を報復するを以てせり。

囑スルニ以テ收二合シ餘燼ヲ一、報二復スル國讎ヲ一。

□甲を着け馬に鞍し、旗幟列を成し、將に起たんとす。

着レ甲ヲ鞍レ馬ニ、旗幟成レ列ヲ、將ニ起タント。

四恩亂　平將軍　平貞盛をいふ。平將門の亂を平定し、功を以て陸奥守たり。

刑部卿　清盛の父忠盛をさす。

内昇殿　昇を反す

駢植

□我且らく一邊に幸したまはんことを請うて、以て事の定まるを待たんと欲す。

我欲レ且ク請レ幸二一邊一ニ、以テ待二事ノ定マルヲ一。

五　家事を以て王事を辭せず

語未だ畢らざるに、重盛淚數行下る。之を久しうして言つて曰く、「重盛尊貌を熟視するに、家門の己に衰運に屬するを知る。重盛之を聞く、『世に四恩有り、皇恩を最と爲す。』と。抑ゝ我が門は、桓武・葛原の胤を辱うすと雖も、而も降つて人臣と爲り、中ごろ微にして顯れず。平*將軍の功を以てするも、而も國守に過ぎず。刑*部卿の内昇殿を聽さるるや、萬人脣を反せり。大人に至るに及び、乃ち太政大臣に陞り、兒の不肖を以てすら且つ大臣大將を辱うし、宗族朝廷に駢植し、田

威を霽らす　何ぞ必ずしも草草するを爲さん　況や…をや　較著　三公　擧ぐるに勝ふ可からず　鬻背　自ら在る有り　源下野守　義朝なり。　六條判官　義朝の父爲義なり。　以爲へらく

園天下に半す。恩を濫にすること極まれり。官家の疾む所と爲るも誰か宜ならずと謂はん。而るに運命未だ盡きず、讒人既に獲らる。宜しく罪の當る所を論じ、退いて事由を陳ずべし。則ち公家豈威を霽らしたまはざること有らんや。何ぞ必ずしも草草するを爲さん。兒又之を聞く、『王事を以て家事を辭すとも、家事を以て王事を辭せず。』と。況や善惡の較著なる者をや。重盛六位より三公に至るまで、君恩に沐浴すること、擧ぐるに勝ふ可からず。鬻背の決は、自ら在る有り。素より撫循する所の士、重盛の爲に死せんことを願ふ者、二百餘人あり。保元の亂に、源下野守勅命を以て六條判官を斬る。兒當時に在つて以爲へらく、大逆無

刎ぬ　徒に

道、言ふに忍びざる者なりと。此れ大人の親しく見たまへる所に非ずや。忠ならんと欲すれば則ち孝ならず、孝ならんと欲すれば則ち忠ならず。重盛の進退此に窮まれり。生きて是の惑を見るは、死するに若かざるなり。大人必ず今日の擧を遂げんと欲せば、先づ重盛が首を刎ねて然る後に發したまへ。」と。且つ言ひ且つ泣く。擧座感動す。清盛曰く、「淨海衰老を以て此の擧を爲すは、一身の爲に計るに非ず。徒に子孫を慮るのみ。乃ち以て不可と爲さば、汝好く之を計れ。」と。乃ち起つて內に入る。

□王事を以て家事を辭すとも、家事を以て王事を辭せず。

以二王事一辭二家事一、不レ以二家事一辭二王事一。

縱令　匡救　慫慂　劉ぬ

□忠ならんと欲すれば則ち孝ならず、孝ならんと欲すれば則ち忠ならず。

欲レ忠則不レ孝、欲レ孝則不レ忠。

□宜しく罪の當る所を論じ、退いて事由を陳ずべし。

宜論二罪所一レ當、退陳二事由一。

宜しく進むべくして進み、宜しく退くべくして退くは、良將なり。

宜レ進而進、宜レ退而退、良將也。

六　怨に報ゆるに恩を以てす

重盛顧みて諸弟を責めて曰く、「今日の事、縱令公老耄して事を發したまふとも、子等何ぞ匡救せずして乃ち之を慫慂する。」と。出でて將士を戒めて曰く、「公に從つて院に赴かんと欲する者は、重盛が首を劉ねらるるを見て、然る後に行け。」

と。乃ち小松の第に還る。既に夜なり。憂慮して措く能はず。是に於て、令を出して兵を徵す。曰く、「大事有り、速に來り會せよ。」と。衆相告げて曰く、「沈重の人、此くの如き令を出す、必ず由有らん。」と。是に於て、爭つて之に赴く。一夕にして二萬餘騎。而して西八條には復た一人無し。重盛乃ち家貞・家能をして往いて清盛を護らしむ。清盛問うて曰く、「小松の第、何に由つてか兵を徵す。」と。二人對へて曰く、「院内府に宣して曰く、『汝が父君恩を忘れ、國家を亂さんと欲す。汝に命じて之を討伐せしむ。』と。内府、君の自ら急にせんことを慮り、臣等をして來り護らしめて曰く、『君之を安んぜよ。重盛在り。當に身を以て請ふべし。』と。清盛惶懼して曰く、

内府　惶懼

事を事とせず　卿　漣然　勞す　謬傳　狃る　姍れ　慚愧

「我が爲に內府に語れ。吾が前途已に迫れり、復た事を事とせず。唯卿之を善くせよ。」と。二人還り報ず。重盛漣然として曰く、「父をして此の語を爲さしむ。吾が罪大なり。」と。乃ち親ら臨んで兵を勞して曰く、「汝等召に應じて卽ち來る。眞に平生に負かず。而れども事謬傳に出づ。宜しく亟かに罷め去るべし。後緩急有らば、幸に狃るること姍れ。」と。因つて盡く罷め去らしむ。法皇之を聞き、泣いて曰く、「重盛怨に報ゆるに恩を以てし、人をして慚愧せしむ。」と。

―「日本外史に據る」―

□憂慮して措く能はず。

富貴も淫する能はず、貧賤も移す能はず。

憂慮不レ能レ措。

富貴不レ能レ淫、貧賤不レ能レ移。

□此くの如し。

光陰箭の如し。

如レ此。

光陰如レ箭。

□當に身を以て請ふべし。

當に分陰を惜しむべし。

當レ以レ身請。

當レ惜二分陰一。

□復た事を事とせず。

不二復事一レ事。

□怨に報ゆるに恩を以てし、人をして慚愧せしむ。

報レ怨以レ恩、使二人慚愧一。

三二　格言十二則

精神一到、何事か成らざらん。

精神一到、何事不レ成。ラ

豹は死して皮を留め、人は死して名を留む。

豹ハ死シテ皮ヲ留メ、人ハ死シテ名ヲ留ム。

知者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は懼れず。

知者ハ不レ惑、仁者ハ不レ憂、勇者ハ不レ懼。レ

義を見て爲ざるは、勇無きなり。

見レ義ヲ不レ爲ルハ、無キ勇也。

膽は大ならんことを欲し、心は小ならんことを欲す。

膽ハ欲レ大ナランコトヲ、而心ハ欲レ小ナランコトヲ。

過つては則ち改むるに憚ること勿れ。

過テハ則チ勿レ憚ルコトムルニ改。

山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し。

破レ山中ノ賊ヲ易ク、破レ心中ノ賊ヲ難シ。

士道に志して悪衣悪食を恥づる者は、未だ與に議るに足らざるなり。

士志シテ於道ニ而恥ヅル悪衣悪食ヲ者ハ、未ダ足ラ與ニ議ルニ也。

君子は言に訥にして、行に敏ならんことを欲す。

君子ハ欲シテ訥ニシテ於言ニ、而敏ナランコトヲ於行ニ。ヒ

悪小なるを以て之を爲すこと勿れ、善小なるを以て爲さざること勿れ。

勿レ以テ悪小ナルヲ而爲スコトヲ之ヲ、勿レ以テ善小ナルヲ而不レ爲サルコトヲ。

志士仁人は、生を求めて以て仁を害することなく、身を殺

して以て仁を成すこと有り。

志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁。

士は當に天下の憂に先だつて憂へ、天下の樂に後れて樂しむべし。

士當先天下之憂而憂、後天下之樂而樂。

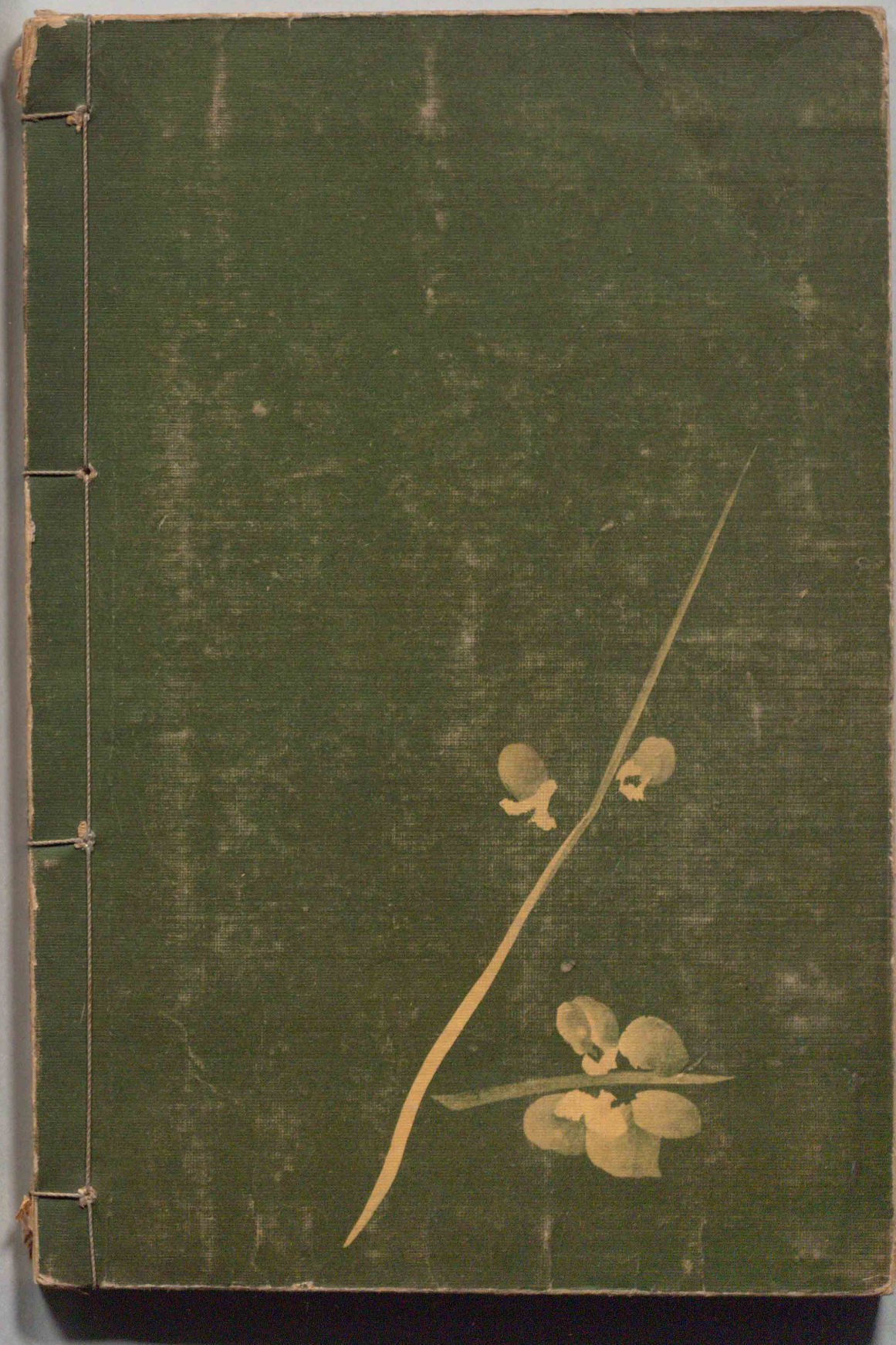
新編 國文讀本 新制版 卷二終

新編國文讀本新制版

昭和六年七月二十日印刷
昭和六年七月二十二日發行
昭和六年十月二十八日訂正印刷
昭和六年十月二十九日訂正發行

新編 國文讀本新制版
定價 自卷一至卷十 各金六拾錢

編者 千田憲
東京市本郷區千駄木町貳百七拾九番地
發行者 塚田六彌
東京市本所區廐橋一丁目廿七番地ノ二
印刷者 守岡功
東京市本所區廐橋一丁目廿七番地ノ二
印刷所 凸版印刷株式會社本所分工場

發行所 東京市本郷區千駄木町貳百七拾九番地 右文書院
電話小石川三七二三番
振替東京七四五二八番

大取次 東京 林平書店・大阪 柳原書店・名古屋 川瀬書店